311
89

長寺西綵子講述

編物講習錄

第六輯

日本編物研究會發行

始

特115
774

會長寺西綠子述

編物講習錄

第六輯

日本編物研究會發行

大正
15. 10. 23
内交

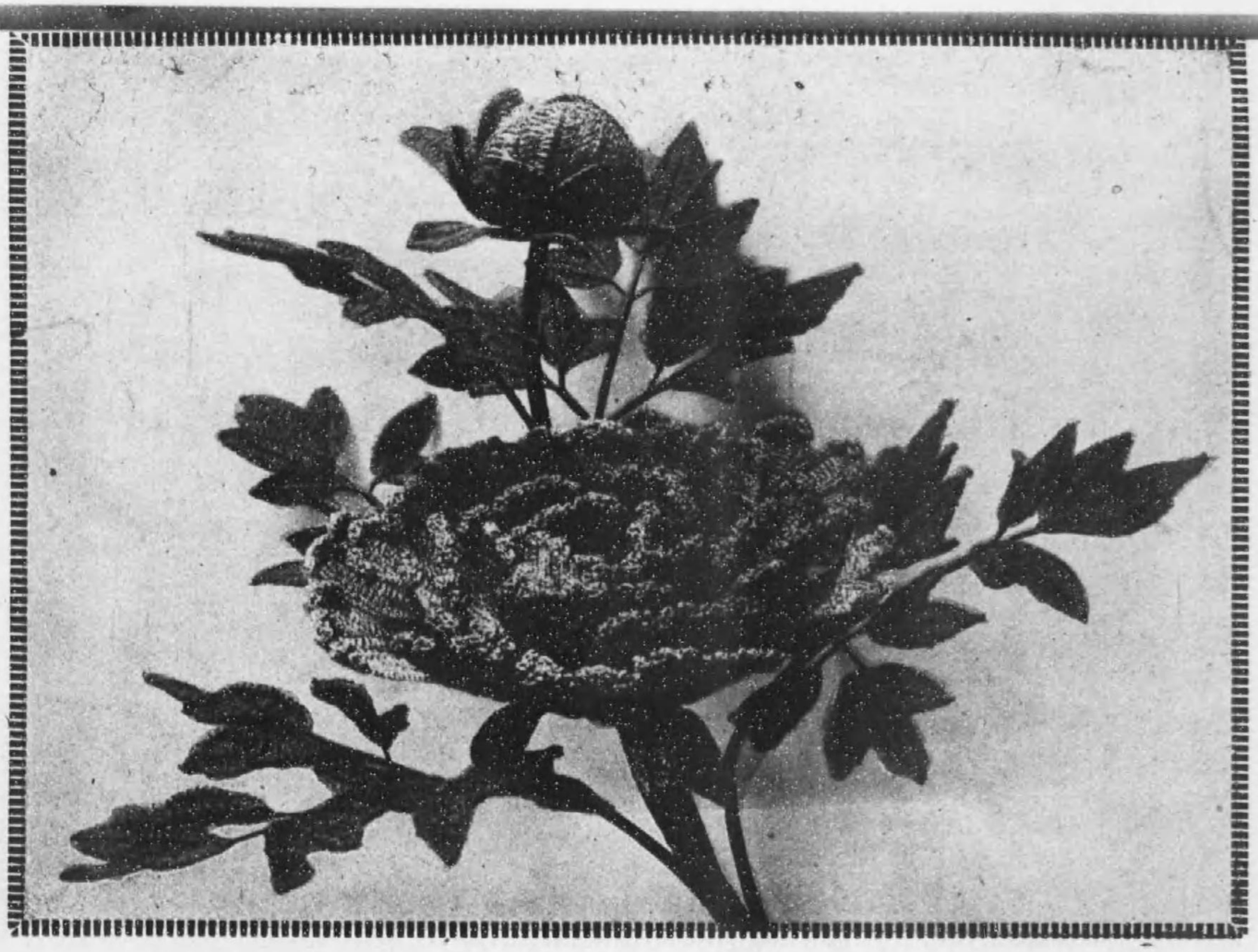
序にかへて

本輯は九重編とレース編の二大秘法を網羅した終篇で御座いまして、内容は申迄もなく平易を旨として講述してありますから文字通りを正直に辿つて針を運びさえすれば、思ふ儘に雅趣に富んだ作品が得られることになつて居ります、又女藝中清新高尚の一科目として御研究の價値あるものとして御奬めしたいと思ふ九重編は、まだ其作品を御覧にならぬ方も御座いませうが、編物を學ぶものは併て、この藝術味のある花を學ぶことを便利と致します。

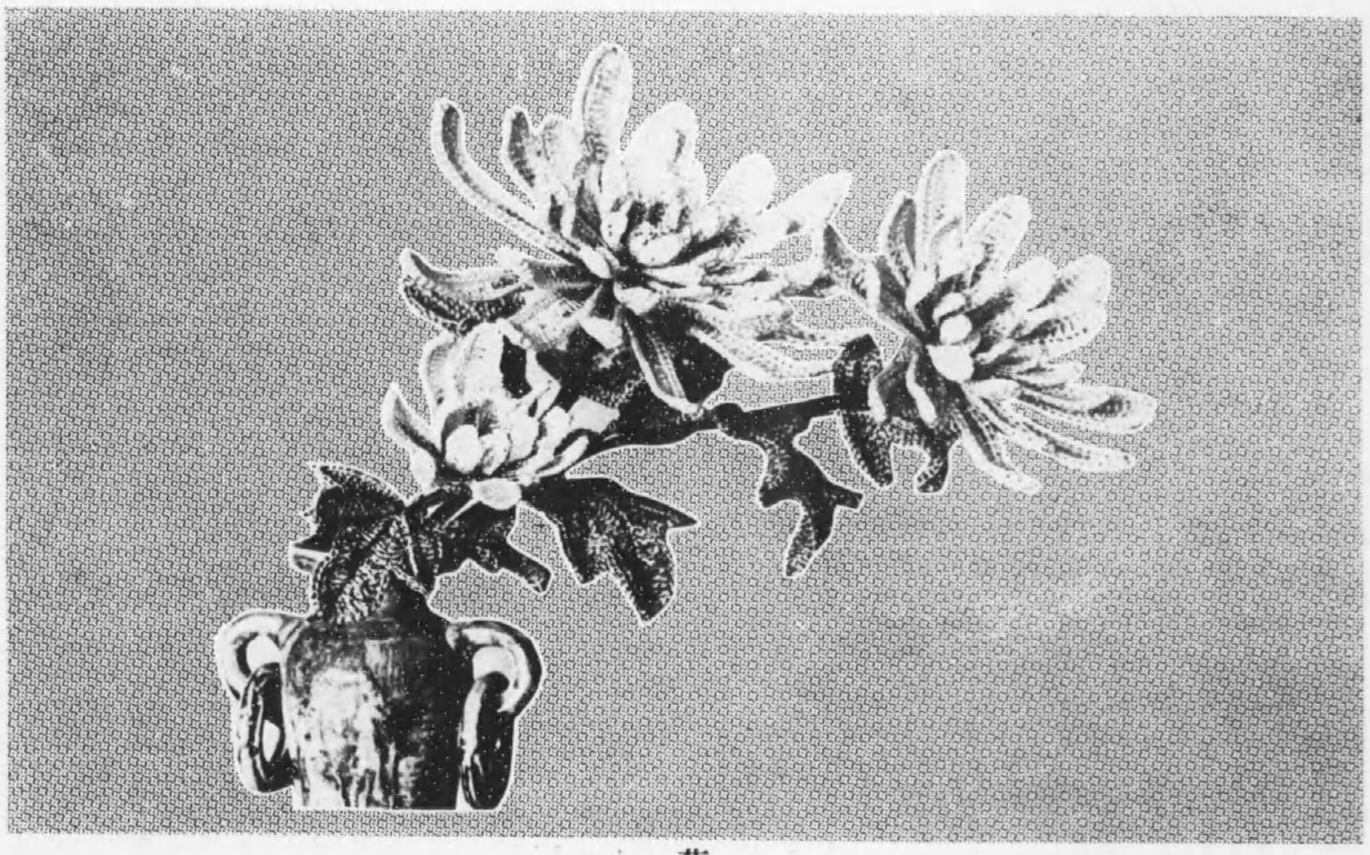
レース編は書中に其要を盡して置きましたが、九重編の方はいろ〳〵の秘法が御座いますので、一つ〳〵に述べるのは煩雜を招くことになりますから第五輯に其種修法として、心得て頂かねばならぬ事柄を詳しく解説して置きましたから御參照下さいませ、それから又質疑の点は御遠慮なく質問券を御利用になる樣念の爲めに申添へて置きます。

大正丙寅晩秋

著者識

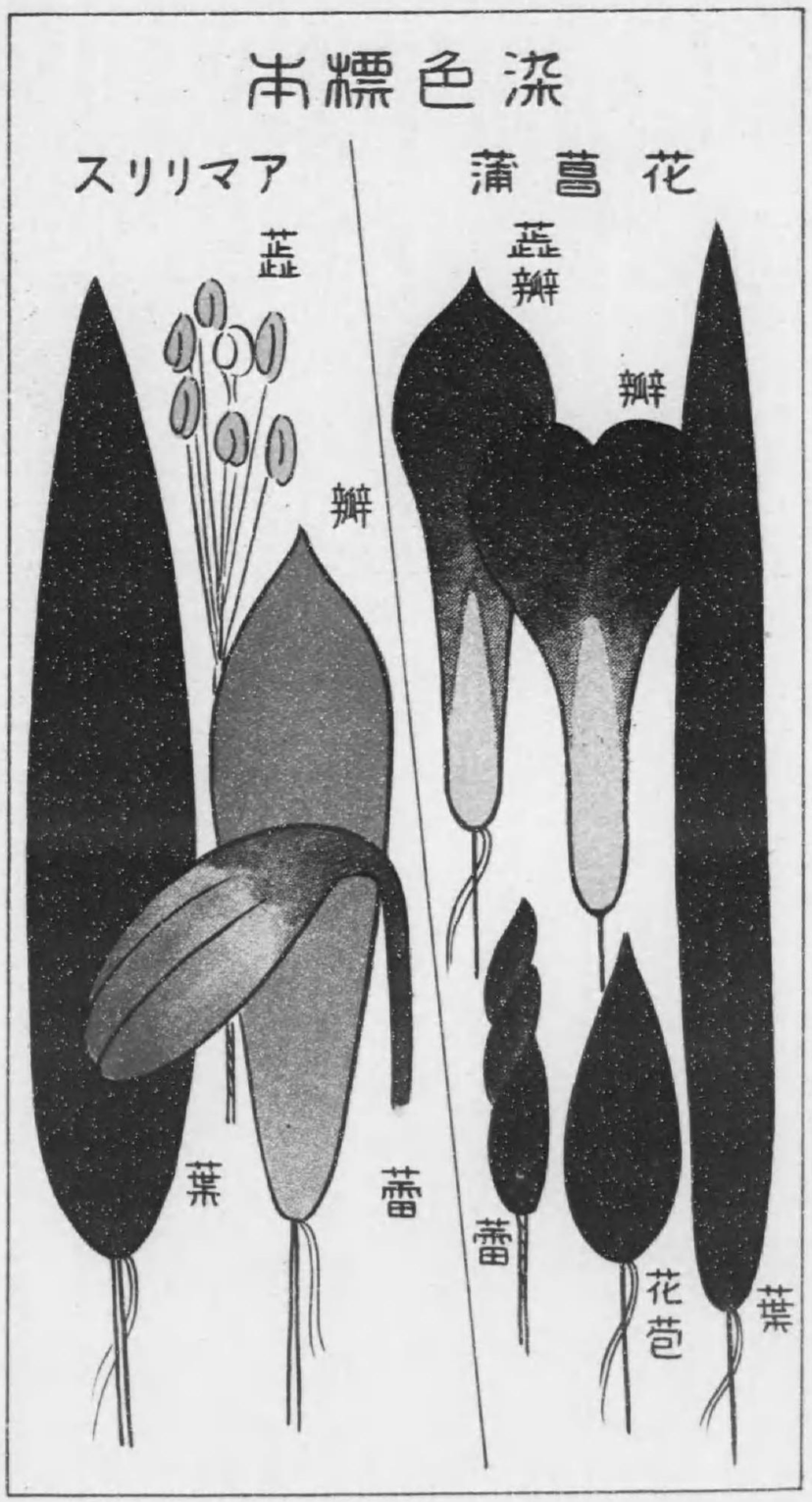


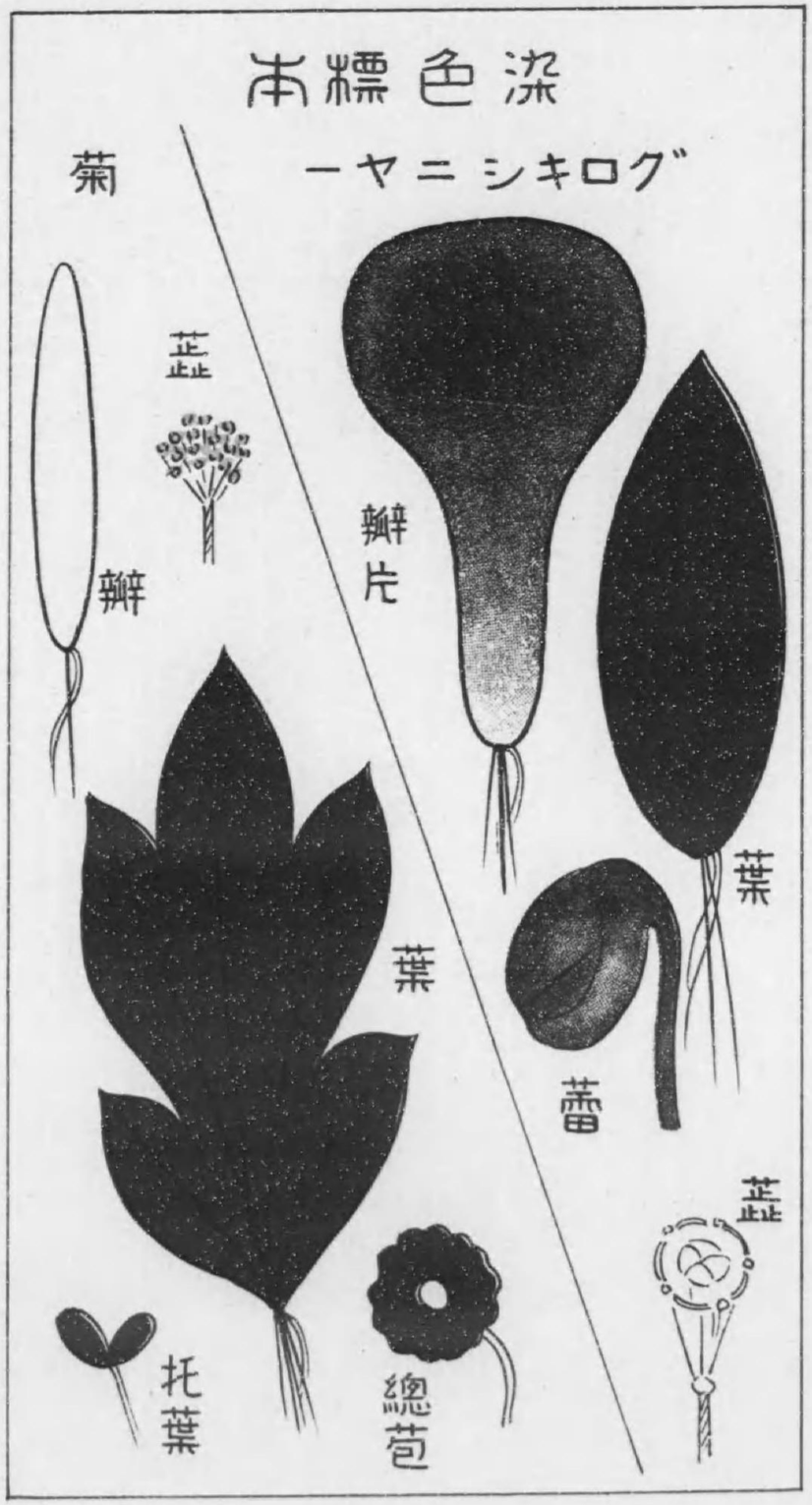
九重編造花　牡　丹

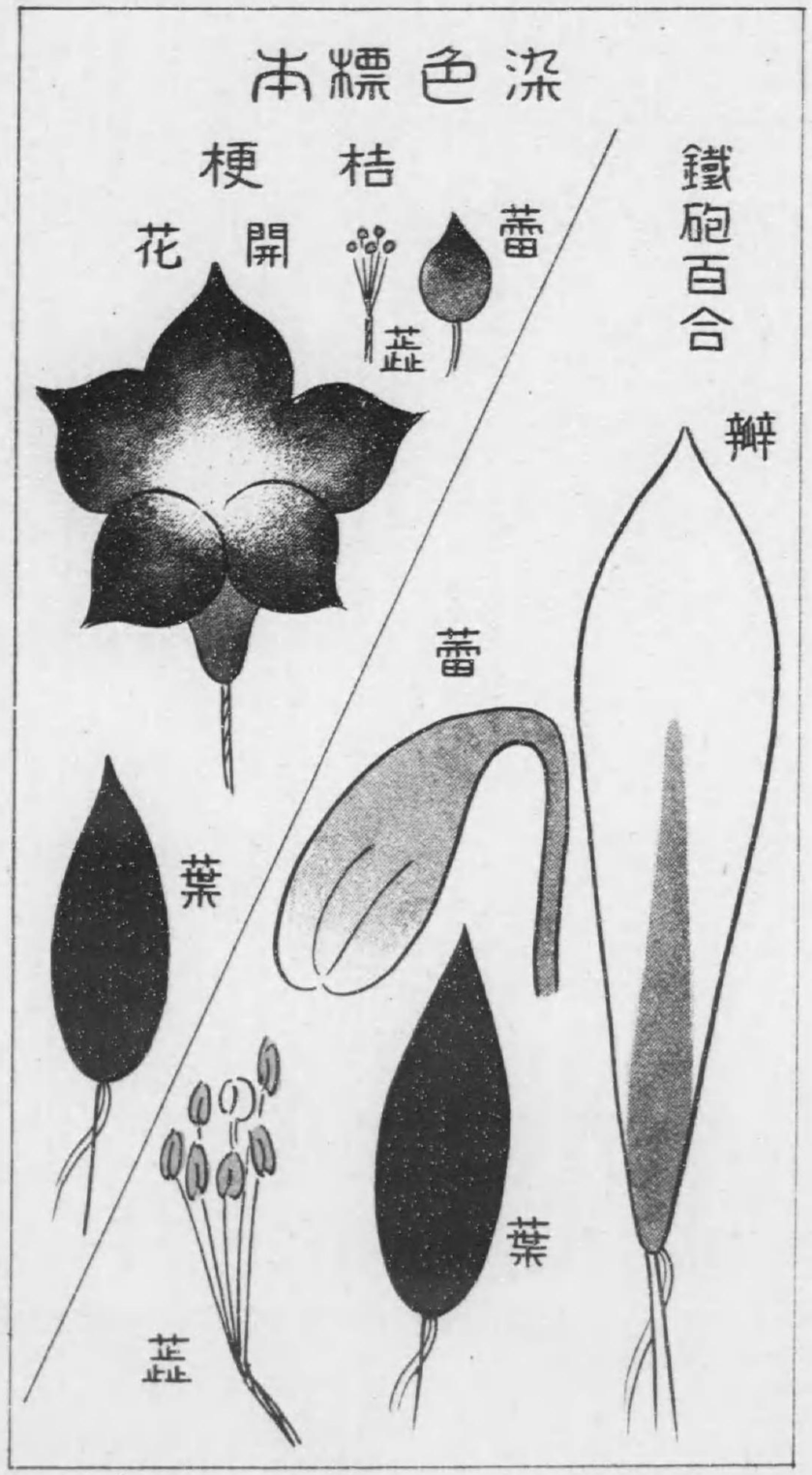


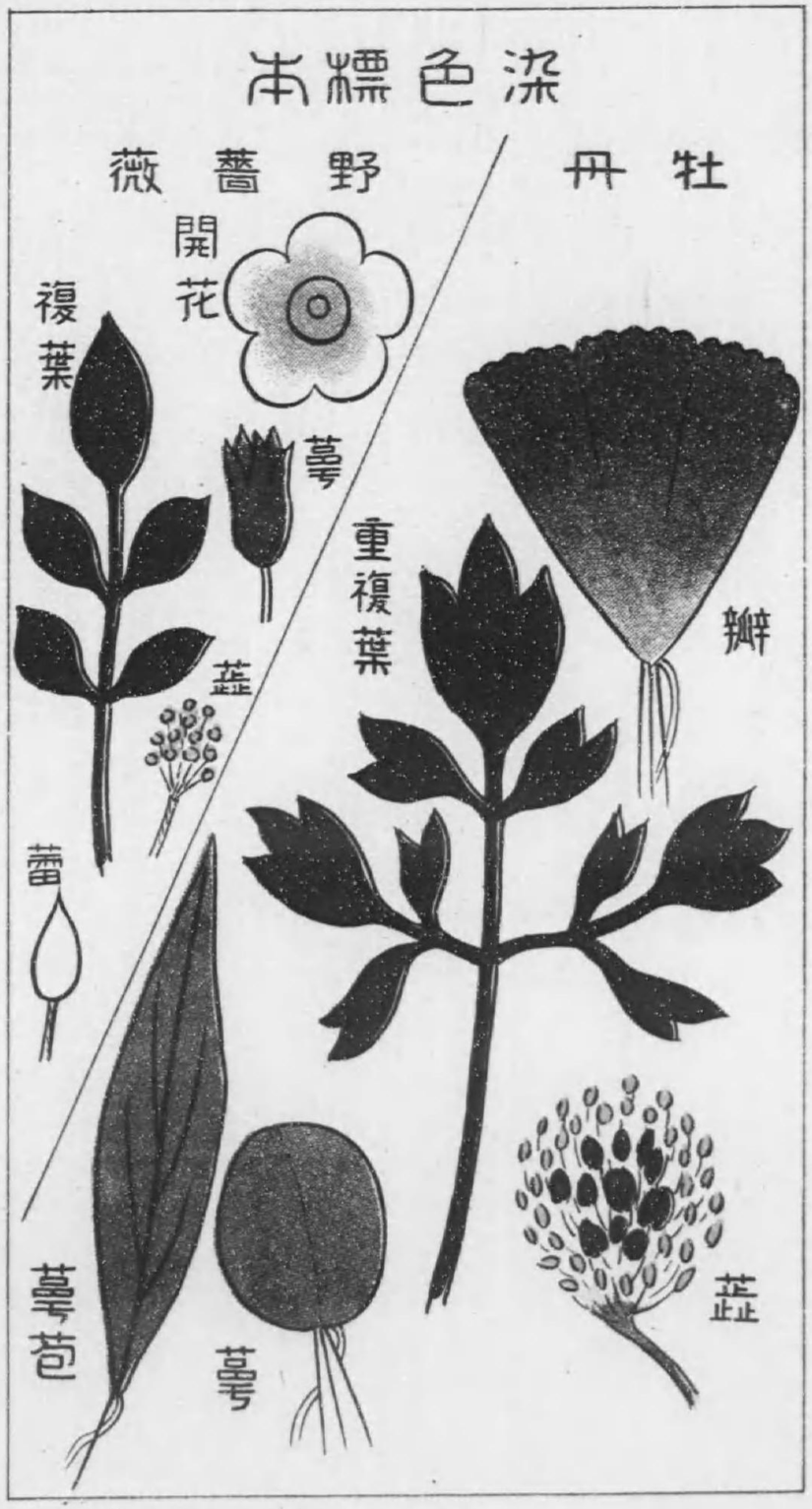
（九重編造花）

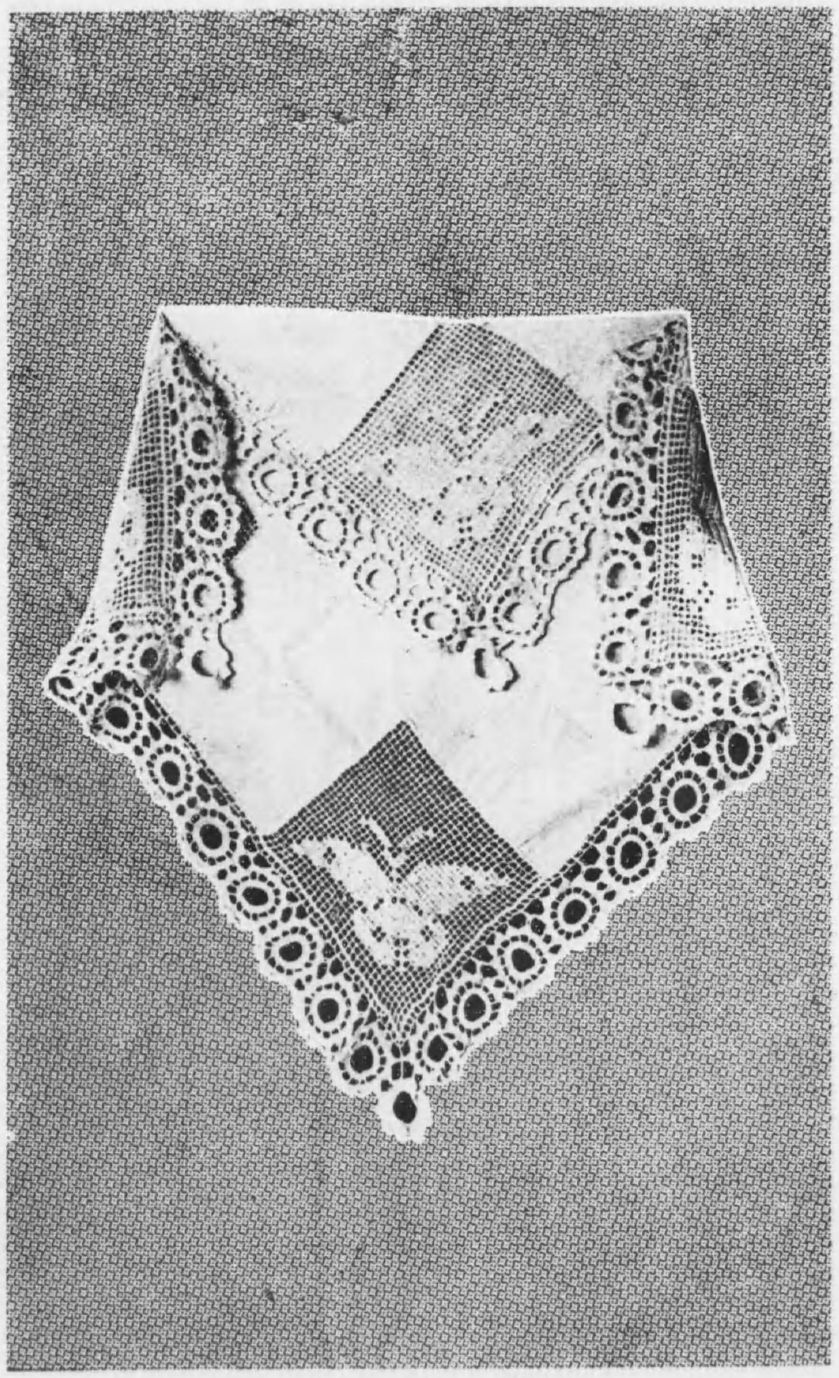
菊


染色標本
スリリマア
蒲菖花
蕋
蕋
瓣
瓣
葉
蕾
蕾
花苞
葉

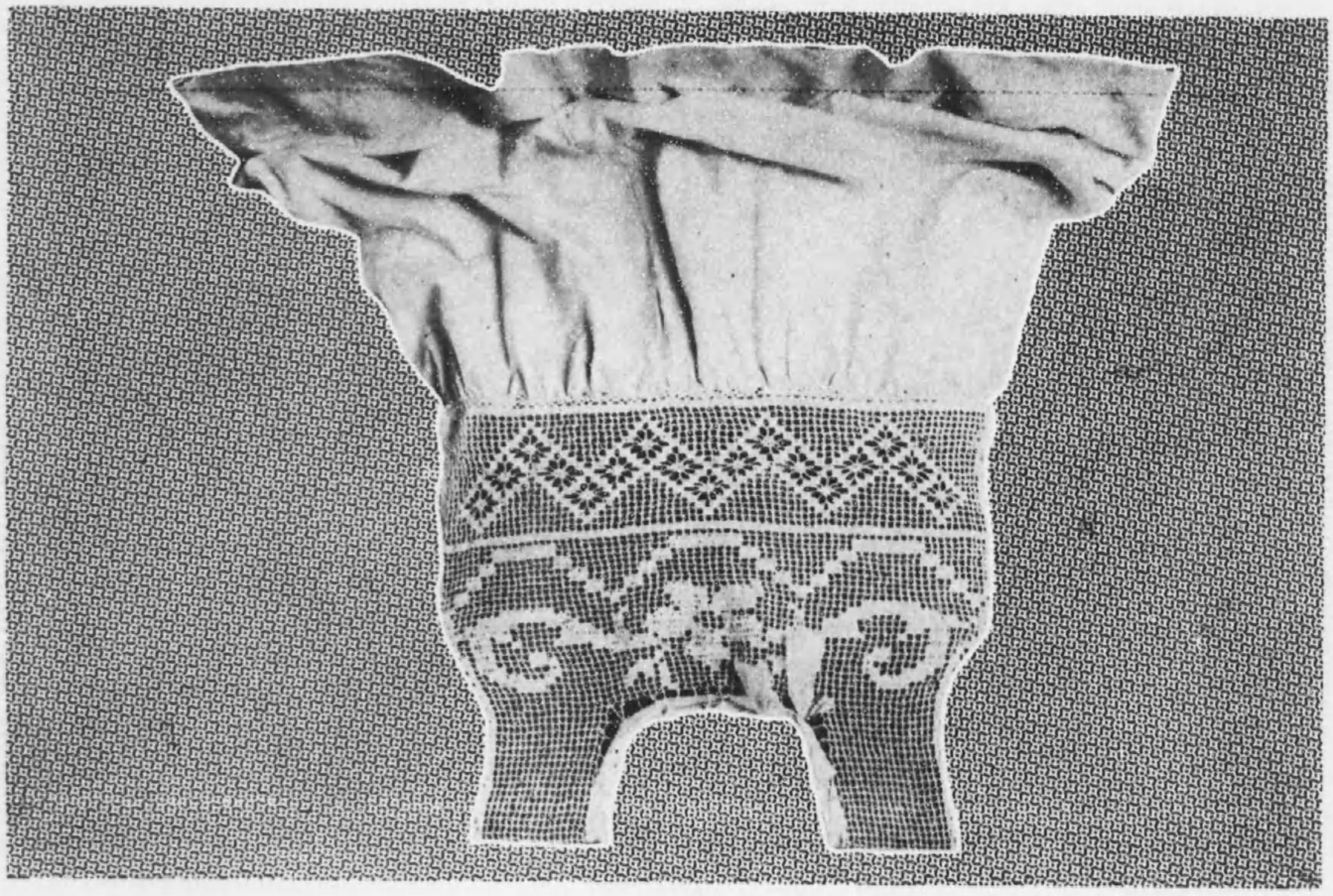

染色標本
菊
ーヤニシキログ
花蕊
瓣
瓣片
葉
蕾
葉
花蕊
托葉
總苞


深色標本
梗
桔
花
開
蕾
蕊
鐵砲百合
瓣
蕾
葉
葉
蕊


染色標本
薇
薔
野
牡
丹
開
花
複
葉
蕚
重
複
葉
瓣
蕋
蕾
蕚
苞
蕚
蕚



卓子掛



觀 下 篇

編物講習錄第六輯

目次

はしがき……一
第一章　九重編造花……二
1　野薔薇……三
編法。染色法。組立法。
2　鐵砲百合……一四
編法。染色法。組立法。
3　菊……二一
編法。染色法。組立法。

頁

4 アマリリス……三五
編法。染色法。組立法。
5 桔梗……四七
編法。染色法。組立法。
6 グロキシニヤー……五八
編法。染色法。組立法。
7 花菖蒲……六九
編法。染色法。組立法。
8 牡丹……八一
編法。染色法。組立法。

第二章 レース編各種……九九

1 手提袋（其一）……一〇五
2 手提袋（其二）……一一〇
3 手提袋（其三）……一一四
4 半手套……一二〇
5 袖口……一二二
6 袖口（レース其一）……一二五
7 袖口（レース其二）……一二七
8 袖口（レース其三）……一二九
9 レース編（其一電小松）……一三一
10 レース編（其二クローバ）……一三三
11 レース編（其三車輪）……一三六
12 レース編（其四大正）……一三八
13 レース編（其五松山）……一四二
14 レース編（其六竪幾）……一四六

15 レース編（其七遠山）……一四九
16 レース編（其八角繋ぎ）……一五四
17 レース編（其九桑松）……一五六
18 レース編（其一〇菊花繋ぎ）……一六二
19 バンドー……一六六
20 下着裾飾……一六八
21 ダリヤ……一七三
22 花九曜……一七六
23 三葉葵……一七八
24 九曜菱……一八一
25 コスモス……一八三
26 枕カバー……一八七
27 敷物（其一）……一八九
28 敷物（其二）……一九三
29 敷物（其三）……一九九
30 車掛……二〇三
31 卓子掛（其一）……二〇七
32 卓子掛（其二）……二一三
33 卓子掛（其三）……二一八
34 卓子掛（其四）……二二二
35 卓子掛（其五）……二二六
36 クッションカバー……二二九
37 櫻花繋窓掛……二三六
38 小窓掛……二三八

編物講習錄第六輯目次畢

39 巴繋ぎ鏡掛……二四四
40 襟飾（其一）……二四八
41 襟飾（其二）……二五二
42 服下着……二五四

編物講習錄 第六輯

寺西綠子講述

はしがき

文化生活と云ふ言葉はもう聞倦いて居ります、さりながら其の内容に於ての文化生活の普及的に實現されるのは未だ〳〵遠いことの樣にも思はれますが、近頃の樣に生活の狀態が日に增し歐風化して疊敷を廢して椅子式に、服裝も洋裝がよい家も文化式の住宅でなければならぬと宣傳され、いろ〳〵の設備が追々と歐米の風習と共通と言つた風になつて來ましたから、昔と違つて只今では何かに付て實際に於ては便利なこと柄が多くなつて來て居るのであります。

日常の生活上に一番密接の關係を以て居る婦人の手を煩はすことによつてそれ等の大部分が日々に整理改善されて行くのでありますから、家庭の主婦がホンの僅かの時

間を經濟的に活用する樣にしたならは、追々と生活を豊富にすることが出來て什んなに幸福だか知れません、そこに眞の文化生活の意義も現はれてくるのでありまする、要するにこんな具合で凡てのことが婦人の力によつて改善されねばならないのでありますから、それ等の方々が尤も容易く應用することが出來て直樣活用して頂くものをと存しまして、終篇に特にレース編と九重編との二種を撰んだので御座います、この二種には多くの秘法が含まれて居るのでありますから、其秘法を探つて趣味の涵養に盡されたならは、樂しみの多い趣味の生活と藝術的氣分を味ふことが出來るのであります。

第一章　九重編造花

永らく御期待に預りました終篇第六輯は豫定の通り茲に出版することの運ひに至りましたことを幸榮と存じます、輯中には文化式の家庭に相應い九重編とレース編の二法を收錄して置きましたから思ふ存分に御利用下さいませ、九重編造花と云ふのは第五

輯に申ました樣に、其名九重の雲深きあたりに迄達せし程の名譽ある編物の花で御座いまして、凡百の花卉の形態を見ながら思ふ儘に編み作ることの出來る方法を御紹介するのであります、花卉の構造や色彩などの點に付ては、多くの石版や寫眞版を挿し加へて實地と變らぬ染色の標本を示して學習の便に供へることに致しましたから、只なぐさみ半分に編み作つて眺め樣と云ふ樣なそんな無意味なものではありません、和洋種取り混ぜて一つ〳〵に其編法、染色法、組立法と云ふ樣に分類して詳しく解いてありますから、この方法を會得せられましたならば其用途は非常に擴い範圍に應用されるのであります、而して初めは面倒でも編む内にいつしか趣味も湧いて來て云ひ知れぬ樂しみをも增すことになり、又普通一般の實用的編物に活用して御覽なさい、それは〳〵新らしい趣きの變つた面白いものが終了ので御座います。

1　野薔薇

草野にあつて崇く清香を放つ花として、又貴重な香油が採れるので其の名が高い、枝振の風雅なことは

第一章　九重編造花　1　野　薔　薇

文人風の盆栽に適して居る、色は通常淡紅色又は白、花容の艶麗なることは野の花の王で御座いませう。

（特　徴）

葉　羽狀複葉で光澤のある小さい葉から成つて互生す。

花　小輪の離瓣花です。

萼　壺狀になつて萼片は五つに裂けて居ります。

蕋　子房の周圍に雄蕋が多數に集つて成るのであります。

編　法

器具材料準備

編　糸　葉色スピン一反。白スピン半反。

卷　糸　綠色少々。

針　金　銅線少々。

（針金卷）　銅線を五寸位のものに五十三本切つて卷糸で其中央部を五分程卷いて、それを二つに折つて罠を作つて其下を二本一緒にして卷いて置く。而して其内の三十三本は葉脈に、殘りの二十本は萼片に編み入れるのであります。

編　針　角製スピン用鈎針。

實　習

葉――葉色のスピンで鎖を十三拵へて其針を後に返して帽子編を一つ編み、次は長編の拔出を一つして次からは少し中脹（なかぶく）れになる樣に長編を編んで、終りの一目手前で長編の拔出をして終りの目には帽子編を一つ編む、これで一葉の右の片側が出來ました。次は鎖を二つ拵へて其の針の次の目に帽子編を一つ編んで前の終りの目に針を通し、其處から針金を入れながら前

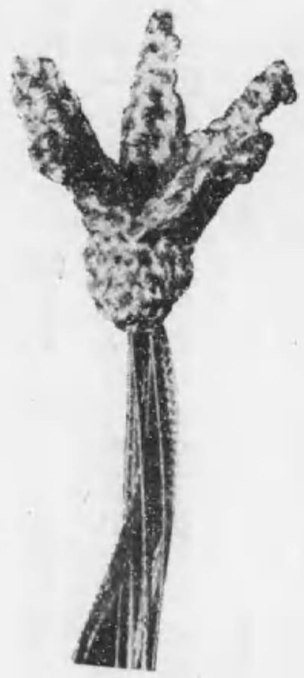
單葉

同樣の格好に編んで一旦糸を切る。同樣の編み方で左の目數のものを編んで置いて下さい。

鎖の目數　　枚數

十　三　四　枚
十　二十三枚
八　六　枚

蕚――蕚も矢張り葉色のスピンで鎖を五つ拵へて丸くして帽子編で止め、又鎖を三つ拵へて初めの罠の中に長編を十編み入れて初めの三つの鎖の上の目に止める。次の段は帽子編計りで一段編み、次は鎖を五つ拵へて針金の罠になつて居る方を下の罠の中から通して其罠の處を右にして持ち添へ、逆目を取つて其鎖の端より三目帽子編を編んで、次は長編の抜き出とし、其次は長編を一つして前の帽子編の目を一つ飛ばして次の目に帽子



蕚

編で止める、これで一つの蕚片が出來るのでありますから、これと同じ方法で初めの五つの鎖を丸くしたものゝ周圍へ、五つの蕚片を編み付けて一つの完全な蕚を編み終るのであります。同様の蕚を四つ編んで下さい。

開花――白のスピンで鎖を五つ拵へて丸くして又鎖を三つ拵へて初めの五つの鎖の罠の中に長編を十二編み入れ、其長編の編み初めの鎖の處に帽子編で止める、それから瓣片を編み付けるのであります、其方法は次の目を一目飛ばして次の目に長編を五つ編み入れ、又次の目を一目飛ばして次の目に帽子編で止め、又一目飛ばして長編を五つ編み入れる、かくして編んで參りますと三つの花瓣が出來ます、それから又鎖を四つ拵へて其飛ばした目に裏側から針を通して帽子編で止め、又鎖を四つ拵へて次へ止めると云ふ様にする、同様にして其鎖の處が五つになる様に致します、而して鎖を一つ拵へて其鎖の中に長編を七つ編み入れ、又鎖を一つ拵へて其中に帽子編で止め、又次の鎖の中に帽子編を一つ編んで鎖を一つ拵へて長編を七つ編み入

れる。かくして其五つの瓣片を編み終つたら、同じ方法でもう一重編み添へるのでありますが、この場合其長編の數を九つにして編んで頂きませう、これで漸く開花の大輪が終了ので御座います。寫眞を御覽になればよく御解りになることゝ思ひます。同樣の方法で大輪二輪と外に大輪より一重少ない中二重丈を編んだものを一輪と、小輪にして中一重丈編んだものを一輪編んで置く。

大輪

蕾＝＝＝矢張り白のスピンで鎖を五つ拵へて罠にして又鎖を三つ拵へて其罠の中に長編を十二編み入れる、次の段からは帽子編で一段編み。二段目からは三目毎に一目宛減らして編んで行つて其目が減滅た時糸を止めて下さい。それで一の蕾が出來ますから同樣の方法で少し手加減して大小不同になつた蕾を二つ編んで置くのであります。

蕾

染色法

材料準備

繪具　葉染料。ローダミン。

染溶器　茶碗二個。

筆　繪具筆二本。

乾紙　古新聞紙二三枚。

實習

花と蕾＝＝＝染溶器に水を入れて筆先にローダミンを少し付けて淡紅色の染汁を拵へ、適當の色合を得ましたら一輪宛の編餘りの糸端を以て染め、新聞紙の上に乗せて乾

します、それから蕾の尖二三分を同色の稍々濃いもので染めて置く。白の儘で組立たいと思ふときは花は白の儘にして置いて染溶器に葉染料の餘り濃くない色合を作つて蕾の下方から四分位迄の間を蔓の代りに染めて置くので御座います、此場合半ばから上の方迄浸み出さぬ様心懸けねばなりません。

組立法

材料準備

卷糸　綠色少々。
針金　銅線と亞鉛線少々。
添竹　ヒゴ竹少々。
卷紙　美濃青色紙。
蕋　四個。

實習

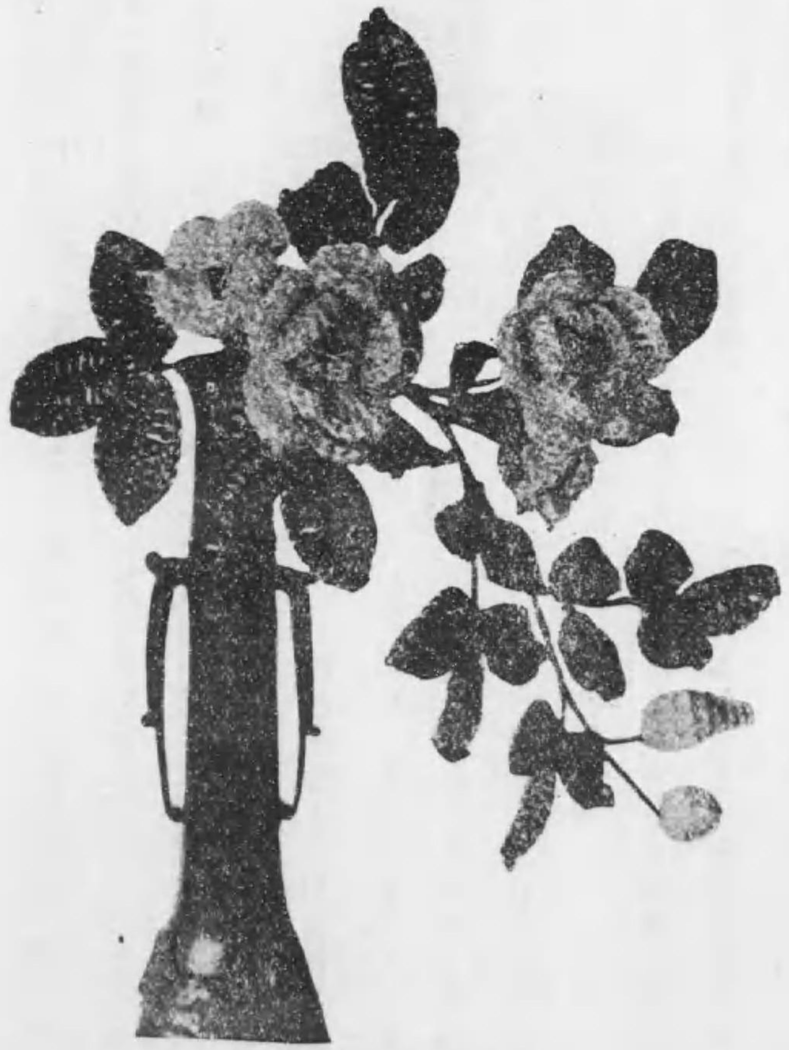
複葉の組方——先づ十三の鎖で編んだものの編餘りの糸と針金とを一緒に持つて、綠色の卷糸で一分計り卷いた處の左右に、十の鎖のものを二枚持ち添へて七分位卷き下つて、又其の處へ十の鎖で編んだものを二枚付け添へて其下を三分卷いて置く。

大複葉

同じ方法で寫眞の様に組立たものを四枚と、別に初めを十の鎖のものにして次に八つの鎖のもの四枚を組合たものを二枚拵へ、尙殘りの單葉で三枚の小複葉を一枚作つて置く。

開花の組立——標本に示して置いた様な蕋に銅線一本を添へて卷糸で搦み止めて、それを開花の中央に通して程よく一寸計り卷き下つて止め、又それを蔓の中に通して今度は叮嚀に一寸計り卷いて糸を

野　薔　薇



終了の寫眞

切る。同様にして殘りの大小の花を四つ共組立てゝ、寫眞の如く開花と半開と云ふ様に二輪宛一緒にして一分計り卷いて置く。

蕾の技＝＝蕾の基部より銅線を一本通して其針金と編み餘りの糸を一緒にして持ち、卷糸で一寸位卷き下つた處へ殘りの蕾を持ち添へ、三分斗り卷いた處に三枚の複葉を添へて七八分卷いて下さい、而して初めは複葉を其次に大複葉と云ふ順に二枚互生に付けて八分斗り卷いた處へ開花を添へ、それと同時に大きな複葉を一枚添へて又八分斗り卷き下つたら、又其處へ大複葉を付け添へて一寸位卷いて糸を切る。

開花の技＝＝此度は開花の下方一寸位の處に中複葉を添へて一寸位卷き下つて、殘りの葉を添へて一寸斗り卷いた處へ、以前組立た蕾の技を持ち添て一纏めにして二寸位卷き下つて置く。而して其下方を必要の長さに切り捨て、卷き終りの下を叮嚀に青紙で卷き止め、花の位置を整へて花瓶に挿すと懸崖になつた風雅な枝振となるので御座います。

2　鐵砲百合

莖の頭は長く延びて葉なく、滑かに光のある白い大輪の花は、常に其の頭を重たげに傾けて居る、その花の姿の氣高くて潔よい美しさは、數ある夏の花の中でこの花に勝るものはあるまいと思はれるのであります。

（特　徴）

葉　披針形で互生す。

花　喇叭狀を呈する六瓣花。

蕋　雌蕋一本雄蕋六本より成る。

編　法

器具材料準備

編　糸　葉色スピン一反。白スピン一反。

卷　糸　綠色と白卷糸少々。

針　金　銅線少々。

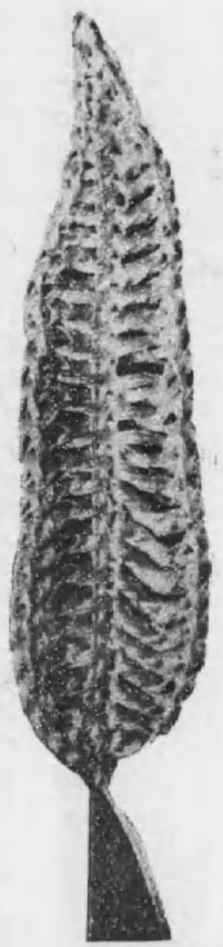
（針金卷）　先づ葉用として銅線を五寸位のものに十二本切り取り、一本宛綠色の卷糸で一旦其中央を五分程卷いて、二つに折つて罠を拵へて二本一緒にして卷いて置く。次は瓣用として八寸位の長さのものを十二本切つて六本は其両端を五分位宛殘して白の卷糸で長い儘で卷いて下さい。殘りの六本は莖用の針金と同じ樣に罠のある二つ折のものに卷いて頂きませう。

編　針　角製スピン用鈎針。

實　習

・葉＝＝鎖四十を拵へて端の一つを帽子編とし、次は長編に次は二重搦の長編で二十目編み、次は普通の長編で次第に短かくして行つて最終の三目手前迄編んで參ります、其の處から長編の拔出で二目編み、次を帽子編にして鎖を三つ拵へます

葉



と一葉の半ばを編み終るのであります、此の處で針金の罠のある方を右にして其針

金を編み入れながら、其鎖の處を逆目を取つて帽子編で初めの鎖の最終の處迄編んで來たら、それからは前半葉の編方を逆に編んで行くと、寫眞の樣な完全な一葉が出來ます。同樣の方法で左の目數のものを編んで置く。

鎖の目數	葉數
四十	四枚
三十五	三枚
三十	三枚
二十五	二枚

瓣——鎖五十五を拵へて端の一つを帽子編にして長編で三十五目程編み、次からは二重搦の長編で最終の八目手前の處迄編み、それからは普通の長編に替へて最終迄編んで行つて、終りの目に長編を三つ編み入れると一瓣の片側が出來ます、それからは罠のある針金を右の方にして持ち添へ、其針金を編み入れながら前の半分と同じ

形になる樣に編んで參りまして一旦糸を切つて置く。

新たに以前の編み初めの一目次の目の處に糸を付け、瓣に編み入れる爲めに準備して置いた長い針金を、瓣の中央に編み入れた針金の罠の中に其針金を通して端から一寸位の處を持ち添へ、次の目から帽子編で其の針金を編み込みつゝ上部の罠の處迄編んで參りましたら、全部の中央の目と針金の罠の中に鈎針を通して帽子編を一つ致します、次からは普通に針金を編み入れながら端迄編むと寫眞の樣な格好の

瓣

一瓣が終了ます。この方法を少し手加減して標本に示して置きました樣な形となる

樣に編む、則ち内瓣三枚と外瓣三枚と都合六枚の瓣を編み作るので御座います。

染色法

器具材料準備

繪具　葉染料。グリーン。レモンエルロー。
染溶器　茶碗二個。
筆　繪具筆二本。
乾紙　古新聞紙數枚。

實習

葉＝＝染溶器に水を入れて沸した中へ葉染料を筆先に付けて少量づゝ入れてよく溶解して思ふ色合となつたら、先づ二十五と三十の鎖で編んだ葉を染める、染つたものは一葉宛新聞紙の上に乘せ列へて置く、而して其殘りの染液に少しの葉染料を入れ添へて少し濃色にして殘りの葉を染め、同じく新聞紙の上に乘せ列へて乾して下さい。

瓣＝＝染溶器に水を入れてグリーンとレモンエルローの極少量を混和して其の染液を筆先に浸し、瓣の中眞の下方の部分を一瓣宛標本に示してある樣に捺染する。

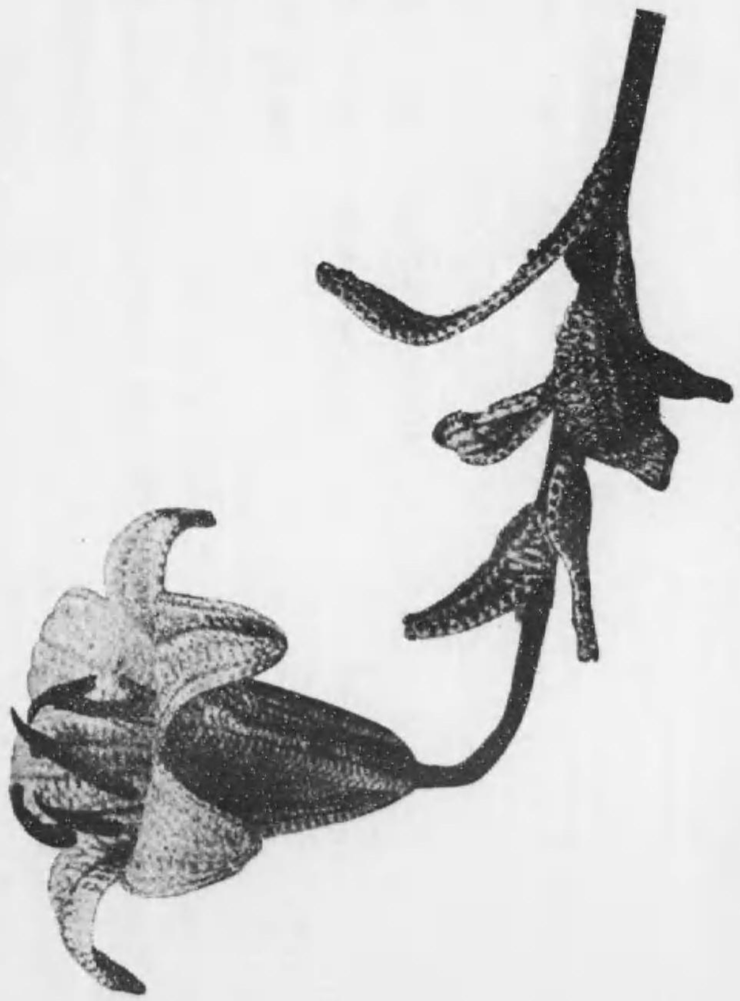
組立法

材料準備

卷糸　綠色少々。
針金　亞鉛線一尺位のもの五六本。
添竹　ヒゴ竹。
卷紙　青色紙。
蕋　一個。

實習

この花の組立を致しますには先づ蕋を中心として、其下方の周圍へ初めは内瓣の三枚



鐵砲百合

眞空の一樣

を一瓣宛表を内に向けて持ち添へ、綠色の卷糸で緊く搦み着け、更に其の外周へ殘りの外瓣三枚を内瓣の間々へ一瓣宛持ち添へて搦み止めて置く、それから其の下方へ亞鉛線とヒゴ竹を添へて青紙で卷いて莖の部分を適當の太さに拵へ、花の際から卷糸で叮嚀に二寸位卷き下つて、最小の葉を着け添へて五分位卷き下り、又小葉を着け添へると云ふ樣にして小さい葉から順々に五分隔位に全部の葉を互生に着け添へて行く、終了ましたら寫眞を見て花の形態を整へて下さい、花姿の優美なることは古來三美花の一として稱へられて居るのであります。

3　菊

菊は本邦の名花で專ら觀賞用として培養されますが、爛漫と咲き競ふ樣はゑもいはれぬ風情がある、恐れ多くも我が皇室の御紋章として群芳中無上の名譽を負ふて居る花であります。

（特　徴）

葉　羽狀に分裂して缺刻があつて互生す。

花　多數の花瓣が密集して頭狀花序を綴る、花色に黄、白、紫、紅、樺、茶、褐、斑色等あり。

総苞　鱗片狀になつて苞が花の外周に叢生して蕚の觀を呈す。

托葉　葉柄の基部に密着して居ります。

蕊　雄蕊の葯が連合して雌蕊の花托上方を包んで居ります。

編法

器具材料準備

編糸　葉色スピン一反。白スピン一反。

卷糸　綠色と白少量。

針金　銅線少々。

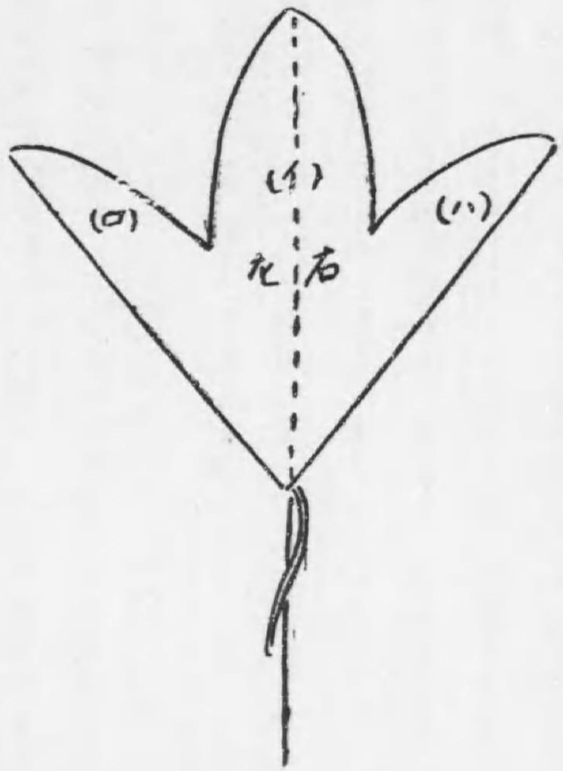
（針金卷）　銅線を七寸位の丈に切つて葉色の卷糸で卷いて二つに折つて髮を拵へたものを四十一本卷いて葉脈を編むに用ひる。それから別に瓣の中に編み込むものは、六寸位の長さに切つた長い儘を白の卷糸で五十四本卷くのと、別に三寸位に切つて二つに折つて髮にしたものを三十三本用意する。何れも叮嚀に卷いて置くことは云ふ迄もないのであります。

編針　角製スピン用鈎針。

實習

葉＝＝大葉から編むことに致ますそれは葉色のスピンで鎖を三十拵へて端の一つを帽子編にして次は長編を三目編み、次は二重搦の長編で五目編み、次は又普通の長編にして次第に短かくなる樣に手加減して三目編むと、圖中（イ）部の左側の編み終りとなります、其處で又鎖を八つ拵へて逆の目を取つて端一つを帽子編にする、次からは長編で其の鎖の終り迄編んで參ります、そこで鈎針に糸を一つ搦んで前八つの鎖の編み初めの處に鈎針を通し又一つ糸を搦んで眞の鎖に鈎針を通し、三重搦の長編を編む心持で其の糸を脱して參ります、次は又二重搦の長編で段々に短かく四目編み次は長編で次第に短かく三目編んで次を帽子編に致します、これで（ロ）の部分の編み終りとなりました、それから葉に準備した針金の罠のある方を左にしてそれを編み込みながら、（ロ）の場合を編んだ方法を逆に（ハ）の部分に編み移つて（ロ）の格

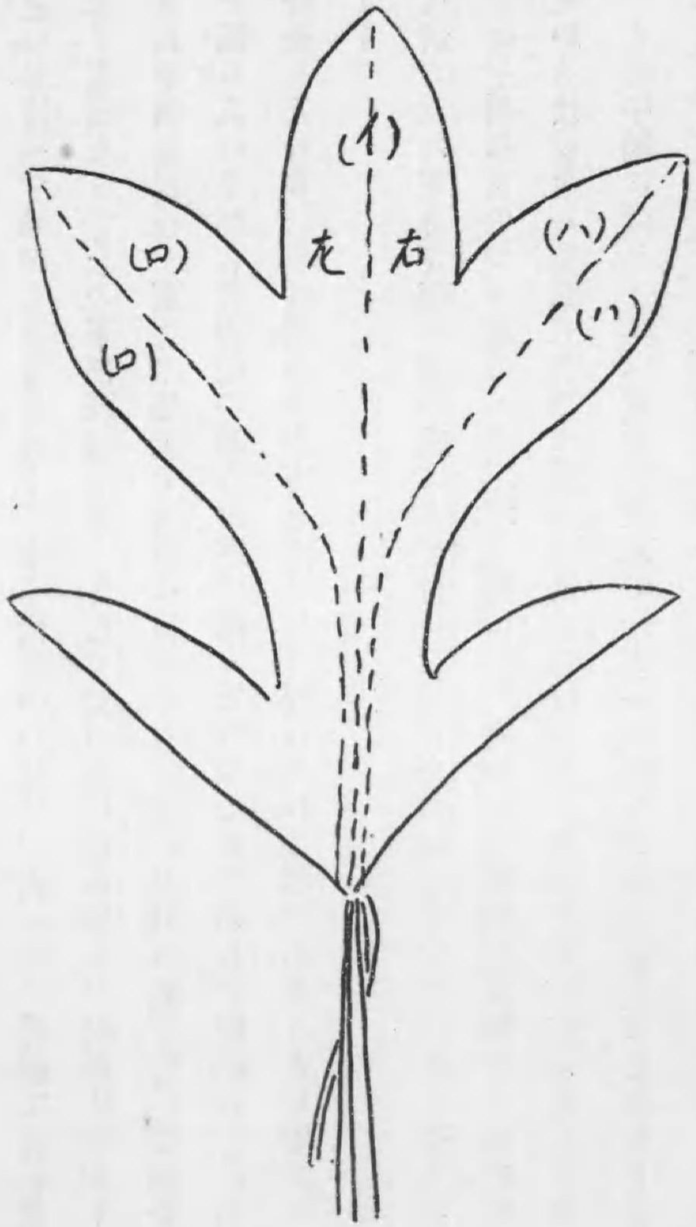
葉　（其一）



好と同じ形態（かたち）になる様に編んで行く、而して順々に(イ)の部の右側に編み移つて、初めに編んだ(イ)の左側と同じ形になる様に、前に編んだ方法を逆に編んで行つて(イ)の上部迄編みましたら一旦糸を切つて置く葉（其一）参照、これで大葉の上部が出來ました。

新たに左側(ロ)の上部の端の處に糸を付け、其處へ葉の針金の罠のある方を此度は右にして持ち添へ、それを編み入れつゝ端の一つを帽子編にして次からは長編で

葉　（其二）



編み進み、(ロ)部を編み終つたら眞の鎖の處に編み移つて二重搦の長編を二目編み、鎖七つを拵へて端から逆目を取つて帽子編を一つ編む、次からは長編で其の鎖を編み終る迄編んで(ロ)の下部同樣に編みまして眞の鎖に編み移り、次第に短かく最終の五目手前迄編む、而して長編で次第に短かくして最終を帽子編で(ハ)の部分の針金を編み入れながら前同樣の編方を逆に編んで行つて糸を切る。此場合(ハ)の部分の針金を入れるときは罠のある方を左にして編み入れるのであることを申添へて置きます。

又新らたに下方左側の端の處に糸を付けたら針金の罠を方を右にして持ち添へ、其針金を編み入れつゝ端の一つを帽子編にして次から二重搦の長編で十五目編み、其次からは普通の長編で次第に短かく編んで行つて、眞の針金の處迄編んで參りましたら帽子編に致します、其處で又他の一方に入れる針金の罠の方を左にして持ち添へ、今編んだ方法を逆に終り迄編んだら糸を切る、葉(其三)は大葉の終了を示したものであります。これと同じ方法で編んだ大葉が七枚要りますから叮嚀に編んで置いて下さい。

葉　(其三)

小葉を編む——小葉を作るには鎖を十八拵へて其の鈎針を後に返し、端の一つを帽子編にして次から長編を次第に長くする樣手加減して十一目編み、其處で鎖を五つ拵へて端から逆目を取つて帽子編を一つ編み、次からは長編で其の鎖を編み終つたら、前の長編の横になつて居る糸に止めて、又元の鎖に編み移ります、それから長編で最終の目迄編みまして終りの目は帽子編を編み、其處から大葉の塲合同樣の方法で罠のある針金を編み入れつゝ前同樣の編方を逆に編んで行く、而して大葉

の場合と同じ様に左側の五つの鎖の部分の端に糸を付けて又針金を編み入れながら大葉の時と同様の方法で編んで行けば終了となりますが、之れと同じ格好の葉を二枚編んで置く。

花　大瓣の拵方——白のスピンで鎖を三十八拵へて其鈎針の處から三つ目の處に長編を一つ編み入れる、かくして順々に編み進んで終から八目手前の處になつたら帽子編に替へて編み、終りの目には拔出で止める。新たに鎖の編み初めの處に糸を付けて瓣に用意して置いた長い針金を持ち添へ、其針金を編み入れつゝ帽子編で一回編み廻れば一つの瓣が出來ますから、次の目數で下方に記した瓣數を編んで置いて下さい。

大瓣

鎖の目數	大輪	中輪	小輪
三十八	八枚	—	—
三十四	七枚	—	—
三十	六枚	六枚	—
二十五	五枚	五枚	五枚
二十三	四枚	四枚	四枚

小瓣の拵方——矢張り白のスピンで鎖を十八拵へて其の逆目を取つて端の一目を帽子編にしたら、其の處から今度は罠のある短かい針金を編み入れながら長編で、最終(なわり)迄編んで捨目を編むと小さい瓣が出來るのであります、同樣の方法で左の目數のものを拵へて置く。

小瓣

鎖の目數　　大輪付屬　　中輪付屬　　小輪付屬

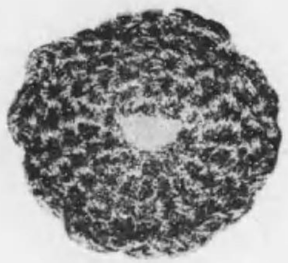
十八　六枚　六枚　六枚

十五　五枚　五枚　五枚

總苞の拵方＝＝先づ葉色のスピンで鎖八つを拵へ丸くして初めの目に帽子編て止め、次は帽子編で一目に二つ宛入れて一廻し、次は目數に增減なく其儘で四廻りし、次は鎖三つを拵へて逆目を取つて長編一つを編み、次の目に帽子編を編んで止めます、かくして周圍に多數の苞片を編み付けますと、寫眞の樣な格好の總苞が出來るのであります。

以上によりまして全部の編方を終りましたから、次は染色方法に付て講述致しませう。

總苞



染色法

器具材料準備

繪具　葉染料。レモンエルロー。グリーン。

染溶器　茶碗二個。

筆　繪具筆二本。

乾紙　古新聞紙數枚。

實習

葉と總苞＝＝染溶器に水を入れて先づ筆先に僅かの葉染料を付けて溶き、其の中色で先づ小葉と總苞とを一つ宛染めて一つ〳〵新聞紙の上に乘せ列べて置く、それから其の殘りの染液を稍濃色にしたもので大葉を一枚宛染めて新聞紙の上に乘せて乾かすのて御座います。

瓣＝＝新らしい染容器にレモンエルローと極少しのグリーンとを混ぜて淡綠色に溶いた染液を、筆に浸して大小瓣の全部を一瓣宛持つて其の下方の中央部を捺染して程

よく暈染めにして置く、これも矢張り染めたら一瓣宛新聞紙の上に乗せて乾かす様に致します。

組立法

材料準備

卷　糸　　綠色と白卷糸少々。
針　金　　銅線少々。亞鉛線一尺位のもの廿本程。
添　竹　　ヒゴ竹少々。
色　紙　　美濃青色紙。
蕋　　薊の心で拵へたもの。

實　習

大輪═══先各葉の編み餘りの糸と針金とを綠色の卷糸で搦んで五分斗り卷き下つて置く夫から蕋の上部に銅線の中央を横に持ち添へ、其針金を下部へ折り曲げて蕋の脱落せぬ樣に針金を二三度捻ぢで置きます、而してそれを中眞にして周圍に初めは十五の鎖で編んだ小瓣五枚を一枚宛付け添へ、其の外周へ殘りの小瓣六枚を付け添へ、又其の外周へ瓣の小さいものから順々に瓣と瓣との間々へ一枚宛持ち添へて緊く搦み付け、全瓣を付け添へましたら其下方を粗く卷き下つて止める、次はそれを總苞の中央に通して其編み餘りの糸と共に又粗く卷いて置く、かくして花莖の部分には必要に應じて太い方の針金とヒゴ竹とを持ち添へ、一旦青色紙で卷いた上を再び總苞の際から叮嚀に卷糸で一寸餘り卷き下り、其の處へ大葉一枚を持ち添へて一寸斗り卷き下つた處へ大葉を互生になる樣に付け添へて三寸斗り卷き下つたら、それからは青紙で卷き下つて止めて置きます。

中輪═══以上にて大輪の組立は御解りのことゝ存じます、次は中輪の組立を致しませう、それは初めは矢張り大輪の場合と同樣に蕋を中心にして其周圍へ小瓣の小さい

菊

ものを一瓣宛付け添へて卷糸で搦み止め、其の外周へ小瓣の大の方を付け添へ、又其周圍へは大瓣の編方の塲合に示して置いた中輪用の瓣の小さいものから順々に搦み付けて其全瓣を付け添へたら一旦下方を青紙で卷いて、これを總苞の中央に通して前輪の塲合と同じ樣に卷糸で卷き下り、初めは小葉を付け添へ次からは大葉四枚を互生に順々に付添し、其下方は矢張青紙で卷き止めて置く。

小輪＝＝小輪の組立にも初めは大中輪の塲合と同じ樣にして殘つて居る小さい瓣から順々に組立てゝそれを總苞の中央に通し、卷糸で小葉を初めに付添して殘りの大葉を互生に付けて緊く搦み止める、其他凡て前輪の塲合を參照して組立てます、かくして全部の組立が出來ましたら、寫眞の樣にピンセットを用ひて花の容を整へるので御座います。

4　アマリリス鉢植

此の花は球根草でありまして花容は豊艶に富み、恰度本邦の百合に似て高尚な氣品を供へ、太い莖頭に

巨大なる數輪を着け、其壯麗偉大なること言はんかたもありません。

（特　徴）

葉　葉は厚くして蘭狀を呈す。

花　大形の六瓣花で其形態漏斗形になつて開展し、其上半は常に外方に反捲して居ります、色には緋、底白、吹掛、絞等がある。

花苞　二つの苞があつて、初めは淡綠色を呈し漸次茶褐色を帶びて參ります。

蕊　雄蕊六本ありて花柱を圍繞し、其花柱は延びて柱頭に三箇の裂片を有して居ります。

編　法

器具材料準備

編　糸　葉色スピン二反。白スピン二反。

卷　糸　綠色少々。

針　金　銅線少々。

（針金卷）白の卷糸で前例を參照して出來上り五寸位の長さで罠のあるものを二十九本。次は白の卷糸で一尺位の針金を其儘の長さで卷いたものを十八本。次は白の卷糸で二尺位の長さのものを長い儘で卷いたものを五本。次は綠色の卷糸で亞鉛線の二尺位のものを矢張り一筋で卷いたものを五本準備して置く。

編　針　角製スピン用鈎針。

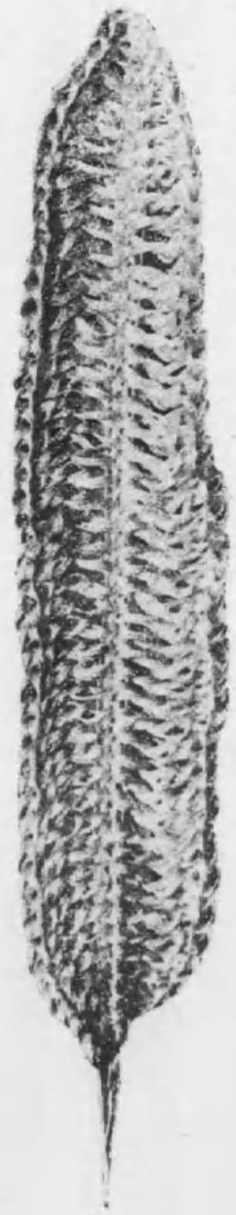
實　習

葉――綠色のスピンで鎖を九十拵へて其の針を後に返し、初めから罠のある銅線の方を葉の中眞脈として編み込みながら帽子編を一目編み、次を長編の扳出にして次から二重搦の長編を次第に長くして三目編み、次からは二重搦の長編で稍長くして終りの五目手前まで編んで行つて、其處から長編を漸次に短かく編んで終りの目に長編の短かいものを三つ編み入れ、それから編み込んで來た針金を曲げて向ふ側に編み廻り、初めの處になりましたら一旦糸を切つて置く。

次は亞鉛線の長い針金を今編み込んだ針金の罠に通して、編み初めの處に糸を付

けて其針金を編み込みながら一回帽子編で編んで糸を切る。これで一葉の出來上り

葉



となりましたから、同じ方法で左の目數のものを五枚編んで置いて下さい。

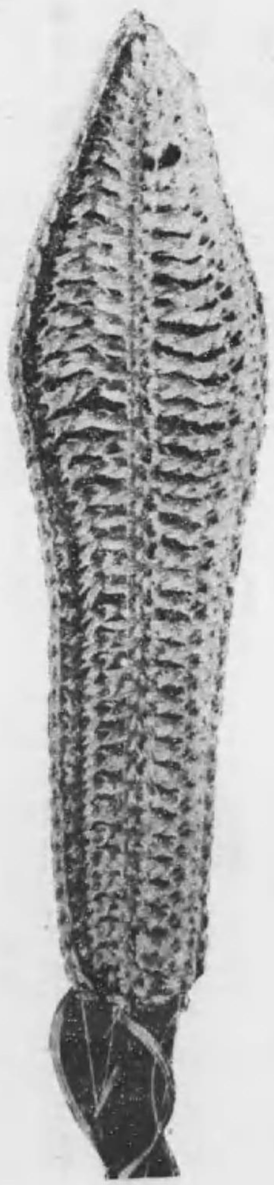
鎖の目數	枚數
九十	各一枚
七十	
六十	
五十	

鱗＝白のスピンで鎖を五十五拵へて初め帽子編を一つ編み、次は長編の拔出を一つ

して次からは短かい長編で三十目編んで行つて、其處から少しづゝ長くしながら五目編んだら今度は二重搦の長編にして十三目編み、次から又長編に替へて少しづゝ短かくして終りまで編んで行つて、針金の罠のある方を右に持つてそれを編み込みながら端の目に短かい長編を三つ編み入れて向ふ側に編み移り、前同樣の編方を逆に編んで終りとなりましたら一旦糸を切つて置く。

それから銅線の長い針金を今編み込んだ針金の罠の中に通して編み初めの處に糸を付け、其針金を編み込みながら帽子編で其周圍を編み廻つて糸を切ると一瓣が出

瓣



來ます、同樣の方法で左の目數のものを編んで置く。

鎖の目數	枚數
五十五（外瓣）	十二枚
五十（內瓣）	六枚

蕾――蕾の編方は瓣のそれと大同小異で御座いまして、瓣の周圍に針金を入れて編んだ處を此度は其部分を編まずに置いて頂きませう、而して左の目數によつて大小不同のものを編んで下さい。

鎖の目數	枚數
二十五（大）	三枚
二十二（中）	三枚
十八（小）	三枚

蕾瓣の全部が編めましたら同目數のものを二枚表合せに持つて、其編み初めの處に糸を付けて帽子編で綴じ付けながら上部の端迄編んで參ります、而して其處へ又同じ目數の蕾瓣を持ち添へ、今綴じ合せた一瓣の一方のまだ綴じ合せをせぬ方へ今度の蕾瓣を表合せにして、今度は上部の端から以前の樣に下迄綴じ合せて行つて一旦糸を切ることに致します。

蕾瓣

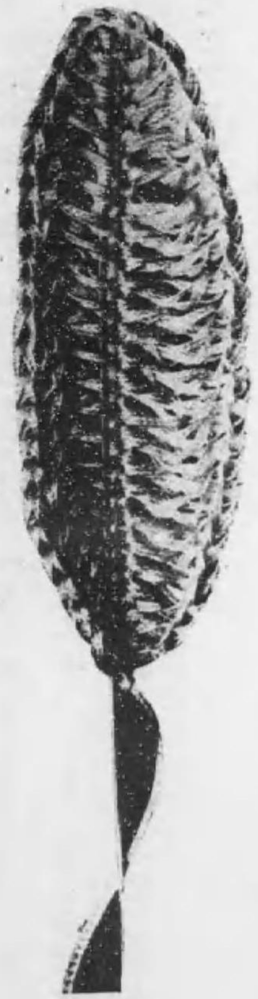
それから初めと終りに綴じ合せた蕾瓣の一方のまだ綴じ合せをせぬ部分を合せ持つて、其下方に糸を付けて帽子編で上部の端迄綴じ合せて行くのでありますが、其半ば位迄編んだ處で蕾の脹らみを見せる爲めに其の中へ少しの綿を入れ、又以前の樣に綴じ合せて行つて其糸を切る。

綴り合せた蕾

以上によつて一つの蕾が出來ましたから同じ方法で大中小三個の蕾を拵へて置きます。

花苞——日のスピンで鎖を三十拵へて其の鈎針を後に返して帽子編を一つ編み、次か

花苞



らは急に長編を長〳〵して二目編み、次からは二重搦の長編でなるべく長くして二十目編む、次からは長編にかへて段々に短かくして終りまで編み、終りは長編を三つ入れて針金を編み込みつゝ前の片側と同じ格好になる樣今迄の編方の順序を逆に編んで行けばよろしい、同じものが二枚要ります。

染色法

器具材料準備

繪具	グリーン。レモンエルロー。スカーレット。ブローン。
染溶器	茶碗二個。
筆	繪具筆二本。
乾紙	古新聞紙三四枚。

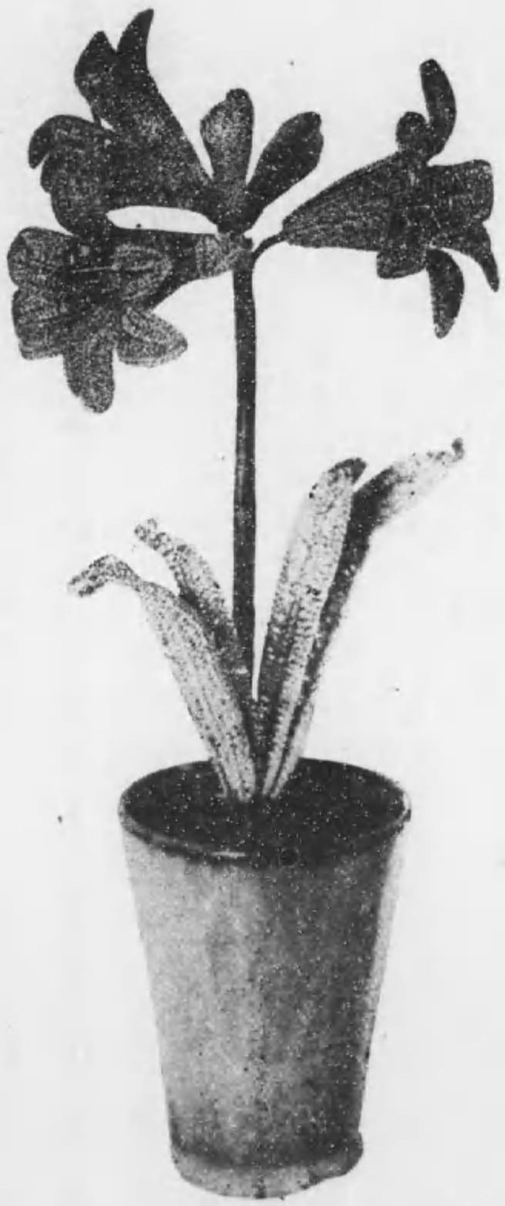
實習

瓣――先づ染溶器に水を入れて火に懸けてよく沸きたゝせ、スカーレットの中色を溶いて其中にレモンエルローを加へ、それに少しのゼラチンを入れてそれの溶けるのを待つて、其染液中へ一瓣宛針金の部分を持つて瓣の上方三分處迄を浸し染め、一應新聞紙の上に表を上に向けて乾かして置く、かくして十八枚の瓣を染め終つたら其染液の中へ少し水を差し、少し淡色のものにして蕾の上部を瓣の時の様に三分處まで染めて置きます、かくして三個の蕾を染めたら一つ〳〵新聞紙の上に乘せて乾かすのであります。

それから別の染溶器にレモンエルローとグリーンとを混ぜ合した淡色を溶いて、それを筆に浸して各瓣の基部から上方へ其中央部を捺染して置きます、次は其の基部も又この染液で染めて置けばよろしい。

花苞――新たな染溶器にレモンエルローとグリーンとブローンとの三色を混ぜ合せた薄色（染色標本參照）で染めて置く。

アマリリス鉢植



終了の寫眞

組立法

材料準備

卷　糸　綠色少々。
針　金　銅線と亞鉛線少々。
添　竹　ヒゴ竹少々。
鉢　植木鉢。
苔　水苔少々。

實　習

開花の組立——此の花は六瓣花で御座いますから、染色圖解中にある樣な蕊を中心として其周圍に、先づ內瓣三枚を一枚宛表を中へ向けて卷糸で搦み止め、次は外瓣の三枚を今搦み止めた內瓣の外側の間々に矢張り一瓣宛持ち添へてよく搦み止めたら

尙其下を一寸位卷き下つてから糸を切る。同樣の方法で三輪共組立て置く。

次は蕾の下の糸端と針金とを一緒にして卷糸で叮嚀に七八分卷いて糸を止める。同樣の方法で三蕾共花柄の部分を卷き終つたら、開花を長く蕾を短かくと云ふ樣に自然的長短を拵へて一纏にして卷糸で緊く搦み締め、其處へ花苞二枚を抱き合せにして其花軸を包んで其下を五六分卷いて糸を切る。それから花苞の下へ亞鉛線とヒゴ竹を持ち添へて花軸を太く拵へて其上を一應青紙で一尺位卷き下つて其端を糊で止めて置く、今度は花苞の下から綠色の卷糸で叮嚀に卷き下つて置きます。

次は小さい葉から抱き合せにして漸次に五枚の葉を組合せ、太い花軸の基部と一緒にして卷糸で卷き搦んで、其端に出で居る針金の餘りで新聞紙を卷き付けて鉢に植へたら其上に水苔に水を浸して乘せ列べ床の間の花臺の上に置て眺めて御覽なさい、今溫室から取り出したかと思はれる計りの生々とした氣分が現はれて居て、實物以上に見榮のする程の作品が得られます、それが又諸姉の思つたよりは案外手輕

に出來るのでありますが、これは編む人ならでは味ふことの出來ないと云ふ、そこに趣味の深い言ひしれぬ樂しみが浮湧して來る樣に思はれるのゞ御座います。

5　桔　梗

秋の野邊の草叢から細長い花梗を生じて、其莖の頭に淡紫色の鐘狀形の花を開く、溫雅な趣きの深い花で咲き出る樣は、常に吟詠の資料や題目ともなる、其の風情の愛らしさは秋草中の優花として持てはやされて居ります。

（特　徵）

葉　卵形で鋸齒のある葉で互生す。

花　鐘の狀をした花で瓣片は五つに裂けて居ります。

蕚　蕚片は五つより成る。

蕚　雄蕚が五本、雌蕚は一本。

編　法

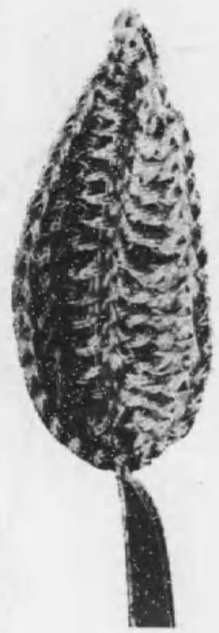
器具材料準備

編　糸　葉色スピン一反。白スピン一反。
巻　糸　葉色と白糸少々。
針　金　銅線少々。
（針金巻）葉用として銅線を五寸位のものに切つて、それを二つに折つて罠にしたものを二十三本巻いて置く。別に花用として六寸位の長さのものを矢張り罠にしたものを八本用意して下さい。
編　針　角製スピン用鈎針。

實　習

葉――鎖三十を拵へて端の一つを帽子編とし、次は長編で段々に長く五目斗り編み、次は二重搦の長編で十四目編み、次からは普通の長編を次第に短かくして行つて最終の目には帽子編を致します、而して鎖四つを拵へて初めに用意した葉用の針金の罠の方を右にして持ち添へ、其の針金を編み入れながら其の逆目を取り、帽子編で

葉

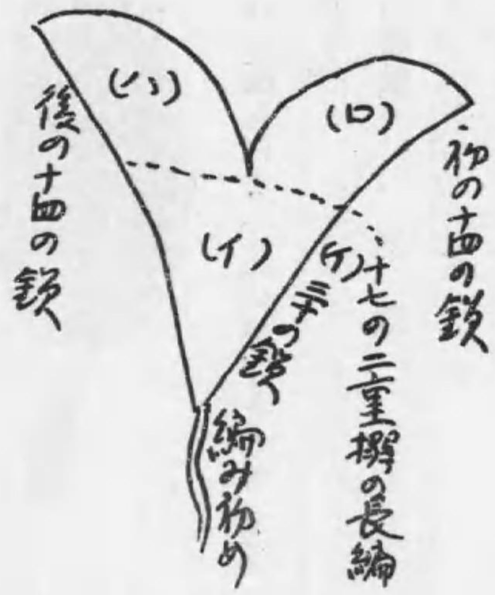


初めの最終の帽子編の處迄編んで參りますと、片側の終了となるのであります、それからは前の片側を編んだ方法を逆に編んで行つて終りは帽子編で捨目を編んだら一葉の終了となります。この方法に基づいて左の目數のものを拵へて置く。

鎖の目數	葉數
三十	三枚
二十五	三枚
二十	三枚
十八	二枚
十五	二枚

次は極く小さい葉を作ります、それは先づ鎖を十拵へまして初めから針金を入れながら端の一つを帽子編とし、次からは短かい長編で最終の二目手前迄編んで參りまして其の次は長編の拔出をする、而して最終は帽子編で終るのであります、同じ方法で編んだものが二枚入ります。

片　瓣　（一其）



開花――偖もこの花は鐘の狀をして居つて編方の説明をするには多少の混雜を免がれませんがなるべく解りよい樣に部分的に述べて見たいと思ふのであります、先づ白のスピンで（イ）鎖三十を拵へまして端

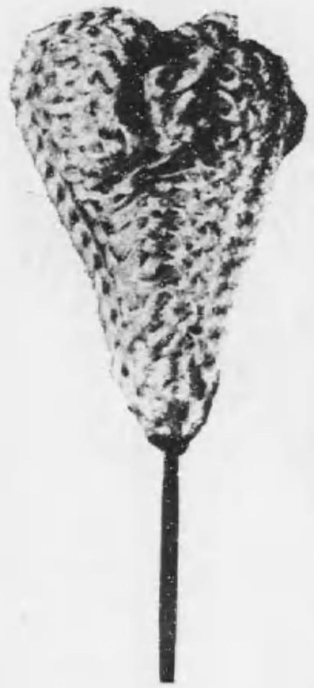
片　瓣　（二其）

の一つを帽子編とし、次は長編に次は二重搦の長編で次第に長くして行つて十目編んだら次からは三重搦の長編で初めより十七目編み、圖中（ロ）の部分の鎖十四を拵へ、端の一つを帽子編とし、次は長編で三目編み次よりは長い二重搦の長編で其十四の鎖の處を編み終りましたら、前に十七編んだ三重搦の長編の横の處に帽子編で止め、初めに殘し

てある十四の鎖に編み移りましたら、二重搦の長編で終りの四目手前迄編んで參ります、次は長編で編んで行つて最終を拔出て止めて置く、かくして編みましたものは茲に圖解した樣な形のものとなるので御座います。

上述の方法によりまして同樣のものを五つ拵へます、而して先づ其の(イ)と(イ)との部分を表合せに致ますと、上部は自然に(ロ)と(ハ)の部分も表合になりますから、其の(ロ)と(ハ)との端の處に糸を付けて瓣用の針金を入れながら下迄帽子編で綴り合せ最終の目に拔出で止めて置く、而して次の瓣片を今の方法によつて編み綴つて行けばよろしい、かくして五つの瓣片を順々に綴り合せますと丸くなつて、五つに裂けた瓣片は恰も鐘の狀をした開花の一輪が得られるのであります。

半開



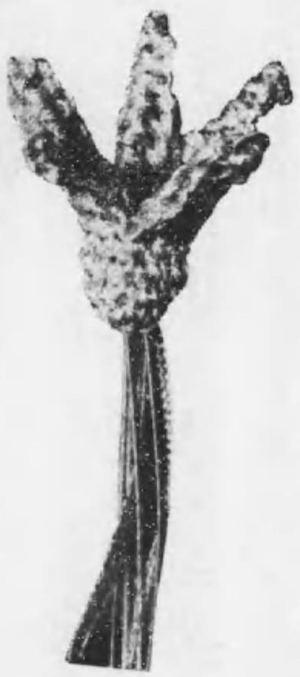
半開＝＝開花の編方でよろしいのでありますが、開花のそれよりも小さいものに編むが爲めに、初めの鎖を二十五拵へて編んだものを三枚作つて置く、而して開花の場合と同樣にして三枚綴り合すと寫眞の樣なものとなります。

蕾＝＝鎖を五つ拵へて丸くして又鎖を三つ拵へて罠の中へ長編を十五編み入れ、次から二段帽子編を編むと其の格好が段々と蕾の樣になつて參りますから、それを表を外にして其の中へ綿を入れて脹らまして四目編んでは一目飛ばして編み、又四目編んでは一目飛ばすと云ふ樣にして順々に編んで行つて、其目が減で一目飛ばし次は二目編んで飛ばすと云ふ樣にして一段編み、次は三目編んで減なつたら糸を切ると寫眞の樣な蕾が出來ます。

蕾

蕚の拵方＝＝先づ鎖五つを拵へて丸くして初めの目に帽子編で止め、又鎖二つを拵へて初めに丸くした罠の中へ長編を十五編み入れ、又それを丸くして初めの二つの鎖

の上部の目に帽子編で止める、次は一目に一つ宛帽子編を入れて一段編みましたら、鎖を七つ拵へて端から針金を入れつゝ逆の目を取つて帽子編を三つ編み、次は長編の抜出を一つ編み、次からは短かい長編で其の鎖を編み終りましたら、初めに編んだ十五の帽子編の目を二目飛ばして帽子編を一目編み、鎖を七つ拵へて前同様の方法で周圍に五つの蕚片を編み着けるのであります、同じ様に編んだ蕚が三つ必要で御座います。



蕚

染色法

器具材料準備

繪具　葉染料。グリーン。レモンエルロー。ビオレット。

染溶器　茶碗三個。

筆　繪具筆三本。

乾紙　古新聞紙數枚。

實習

葉と蕚——染溶器に水を入れて沸したら、葉染料を溶いて先づ大葉を染めて置く、而して其の殘りの染液を少し淡色にしたもので、小葉と蕚とを浸し染めて一つ宛新聞紙の上に乗せて乾すのであります。

開花と蕾——新らしい染溶器にビオレットの淡色で上部から半ば位の處迄を染めて下さい、すると其の染液が漸次下の方へ浸み出て暈しに染まるので御座います、而して又新らしい溶器にグリーンとレモンエルローとを混ぜ溶いた極く淡青色の染汁が出來たら、其の染汁を筆の先に付けて開花と半開と蕾の下方を暈かしになる樣に染めて置く。

組立法

材料準備

卷　糸　淡綠色少々。
卷　紙　美濃青色紙。
針　金　亞鉛線少々。
添　竹　ヒゴ竹。
蕋　二個。

實　習

半開の枝――先づ蕋を半開の中央に通して卷糸で搦み、それを又蕚の中に通して其の際から亞鉛線を添へて編み餘りの糸と共に卷糸で五分斗り卷き下つた處へ極く小さい葉を付け添へ、又五分程卷き下つて次の葉を着けると半開の枝が出來るのであり

ます。

開花の枝――先づ蕾の編み餘りの糸と針金とを一纏にして卷糸で一應あらく卷いて蕚

終了の寫眞

の中に通し、其の際から五分位卷糸で卷いて一旦切つて置く。

それから蕋に針金を添へて卷糸で搦み止め、それを開花の中央に通して卷糸で搦んで再び蕚の中に拔き通して卷糸で搦んで五分斗り卷き下り、其處へ小葉を着け添へて又五分位下つた處へ次の葉を着けましたら、其處へ以前拵へた蕾を持ち添へて緊く卷き下りながら四枚の葉を順次互生に着け添へて下さい、而して初めに拵へて置いた半開の枝を持ち添へ、同時に大葉を一枚添へて一緒にして五分斗り卷き下つて又一葉を着ける、それから殘つて居る丈の葉を順次に着け添へなから必要の丈に卷いて置く、編み餘りの糸と針金とは叮嚀に切り捨て花の位置を改めます、これで秋の野邊を飾るいとも優さしい桔梗の枝の組立を終りました。

6　グロキシニヤー鉢植

初夏の頃一つの球根より四五寸の花軸を生して其軸頭に筒形の艶麗な大輪の花を開いて能く數日間滿開して居る、近來鉢植として一般に賞觀せられるのであります。

（特　徴）

葉　楕圓形で葉の両面に毛を生ず。

花　色には紫、淡紅、絞などあつて筒形の喇叭咲で滑かな光澤がある。

蕚　淡綠色の五つの蕚片を供ふ。

蕋　雌蕋一本雄蕋五本。

編　法

器具材料準備

編　糸　葉色スピン一反。白スピン一反。

卷　糸　白と綠色少々。

針　金　銅線と亞鉛線少々。

（針金卷）葉用として亞鉛線を一尺五寸位のものに五本切つて、長い儘で綠色の卷糸で卷いて置く、それから又蕚用として銅線を六寸位のものに十五本切つて罠を拵へて卷く。尙又花と蕾用には銅線を一尺位のものに十三本切つて長い儘で白の卷糸で卷いて置いて下さい。

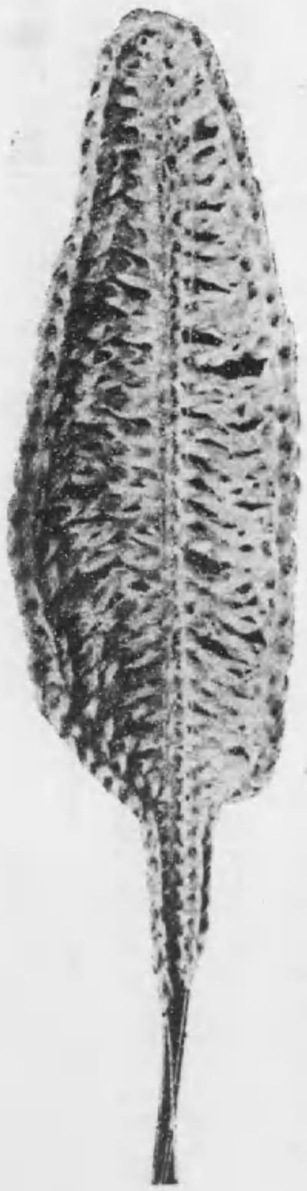
綿　少々。

編針　角製スピン用鈎針。

實習

葉を編む——葉色の糸で鎖を五十五拵へて其處から針金を編み込みながら、帽子編を八目編んで次は長編の扱出に次を三目長編で少しづゝ長くして編んで行く、次は二重搦の長編で次第に長く編み行き、其處から三重搦の長編で終りの十五目手前迄編んで行く、それからは二重搦の長編で次第に短かく十目編み、次は普通の長編で

葉



漸次に短かくして終りは極短かい長編を三つ編み入れて、針金を曲げて前の鎖の向ふ側に編み移つて其葉の右側を編みました時と同樣の形になる樣逆に編んで終りとなります、これで一葉が出來ましたからこの方法で左の目數のものを編んで置く。

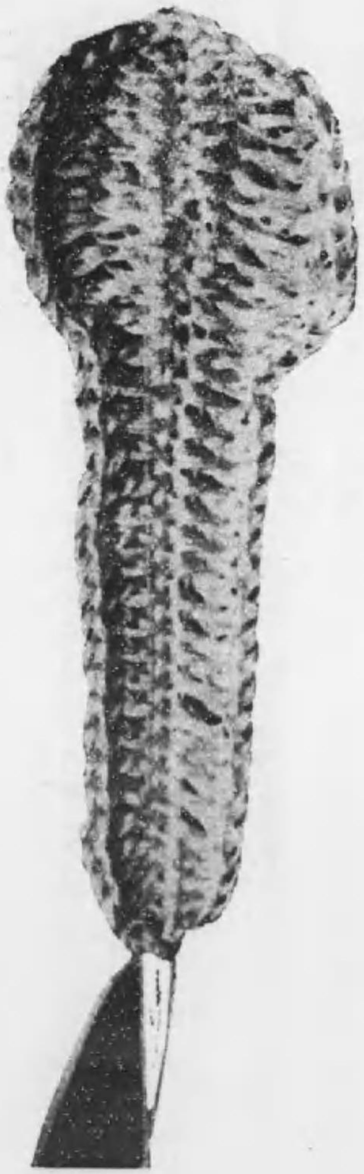
鎖の目數	枚數
五十五	一枚
四十八	一枚
四十	二枚
三十五	二枚

右の内三十五の鎖で編む二枚の葉は、二重搦の長編でよろしい。

花——白の糸で鎖を四十拵へて其針を後に返して針金を編み込みながら、短かい長編で其の鎖の終りから十三目手前迄編んで行つて、其處で二重搦の長編を漸次に長くして二目編み、次からは三重搦の長編で八目編んで次は二重搦の長編を普通にして、

終りの目には短かい長編を三つ編み入れ、針金を曲げて前同様を逆に編んで同じ形になる様にして、其片側を編んで糸を切る。

瓣片



同様の方法で左の目數のものを編んで置く。

鎖の目數	枚數
四十	五枚
三十五	五枚

瓣片の綴り合せ

二十五　三枚

瓣片の綴合せ——此の花の基部は筒狀になつて其先に瓣片を五つ供へて居て、さながら喇叭の樣な格好で御座いますから、以前編んだ瓣片を五つ綴じ合せて筒狀のものにするのであります、これから其綴じ合せの方法を申ませう、先づ四十の鎖で編んだものを二枚表合せにして、其上部の脹らんだ部分を右になる樣に持ち、長編と二重搦の長編の境目の處に糸を付け、其の下方を帽子編で編み

合せて一旦糸を切つて置く。それから又別の瓣片を表合せに持ち添へて同様の方法で編み合せをする、かくして同じ様に編んだものを順々に五枚編み合せますと、筒狀になつた五瓣の喇叭咲の一輪が得られます。

次は三十五の鎖で編んだ瓣片五枚を前述の方法で編み合せたら、今度は二十五の鎖で編んだ瓣片三枚の全縁を編み合すので御座いますが、其の方法は二枚表合せに持つたら其の下の端の處に糸を付けて、開花同様帽子編で上部の中央迄編み合せ、其處で殘りの一枚を持ち添へて下迄編み合せて行つたら糸を切る、而して亞鉛線の中央に綿を卷き付けて二つ折にして捻ぢたものを、今編み合せたものゝ中へ入れて初めの瓣と終りの瓣とを合せて上部の中央から編み合すと、寫眞の様な蕾となるのであります。

蕾

萼＝＝鎖を七つ拵へて丸くして又鎖を三つ拵へて罠の中へ長編を十五編み入れてそれを今拵へた三つの鎖の處に止め、又鎖を三つ拵へて一目に一つ宛長編を入れて一段編み、其處で帽子編を一段編み、鎖を十拵へて罠のある針金の罠の方を編んで行く針の右になる様に通し、其針金を編み込みつゝ十の鎖の初めから帽子編を三目編み、次は長編の拔出を一つして次からは漸次に長編を長くして行つて其鎖を全部編み終る、次は前の帽子編の目を三つ飛ばして四つ目に止めると、一つの萼片が出來るのであります、この方法で初めの罠の周圍に五つの萼片を編み付けるので御座います。

萼

これと同様のものを三個拵へて置いて下さい。

染色法

器具材料準備

繪具　葉染料。ローダミン。
染容器　茶碗二個。
筆　繪具筆二本。
乾紙　古新聞紙二三枚。

實習

蕚＝＝染溶器に葉染料を溶いて蕚の編み餘りの糸端を持つて其染液中に浸し染め、一つ宛新聞紙の上に乗せて乾かす。

開花と蕾＝＝新らしい染溶器にローダミンの中色を溶いて、先づ瓣片の中央部から筒狀になつて居る部分へ掛けて標本の通りに捺染する、三輪共染め終つたら蕾の針金の處を持つて其先丈を染液中に浸し染めて置く、而して其染液を極く濃色のものにして、各輪の捺染した部分の中央部丈を極く濃色のものに致しますと、中央部の濃色から漸次淡色に暈かしの樣になるのであります、かくして各輪の瓣片を順々に捺染して下さい。開花を染め終つたら次は蕾の先丈を同じ濃色の染液で染めて置きます。

組立法

材料準備

卷糸　緑色少々。
針金　亞鉛線少々。
添竹　ヒゴ竹少々。
卷紙　美濃青紙。
蓋　二個。

實習

開花——標本に示した莖に一本の亞鉛線を添へ卷糸で搦み付け、開花の中に通して又

グロキシニヤー鉢植

終了の寫眞

卷糸で搦み付け、又それを蕚の中へ通してそれに亞鉛線とヒゴ竹とを添へて適當の太さにして一應青紙で卷いて、其上を卷糸で花軸の部分を五六寸叮嚀に卷き下つて置く。殘りの開花もこれと同樣の方法で組立をして下さい。

蕾——蕾には莖の必要がありませんから、すぐそれを蕚の中に通して開花の樣に花軸を適當の太さにして一應青紙で卷いた上を、更に卷糸で叮嚀に卷いて置く。

花の組立が出來ましたら其全部を一纏めにして、卷糸で其周圍に葉の小さいものから順々に輪生に付け添へて緊く卷き止め、其下部を粗らく卷いた上を青紙で卷き包むのであります、而してそれを鉢植にして御覽なさい、隨分珍らしい溫室ものの鉢植が出來るので御座います。

7　花菖蒲

端午の節句には屹度菖蒲と蓬が軒に挿される風習は、惡鬼を拂ふと云ふ傳說から昔ながらの行事の一つである、又尙武の意味にも通はせたものでありますが、今茲で云ふ菖蒲とはなべての人に持てはやされ

る花菖蒲のことで、端午には縁のないものとされては居るものゝ、花も姿も好く似通つたものでありますから全然無縁のものにしたくはありません、花は紫、白、染分、覆輪などいろ〳〵に咲き亂れて下ゆく水に花の姿を映し、道行く人の足を停めしむる風情があるので御座います。

（特　徴）

葉　多數に叢生して劍狀を呈する根生葉で御座いまして、其下部は互に抱き合ふて居るのであります。

花　抱き合ふて居る葉の間から花軸を抽いて、其頂端に紫色又はいろ〳〵の色採を帶びた六瓣花を開きます。

花苞　舟の形をして蕾を包んで居る。

蕊　雌蕊は一本、雄蕊は三本ありますが、花柱の裏面に存して保護せられて居るのであります。

編　法

器具材料準備

編　糸　葉色スピン二反。白スピン一反。

卷　糸　綠色と白少々。

針　金　銅線と亞鉛線少々。

（針金卷）葉用としては亞鉛線の長いものは三尺位から段々に短かくして二尺位までのものを六本と、別に一尺位のものを二本切り取つてそれを長い儘で卷いて置く。

花と蕾と花苞用には銅線を八寸位に切つて、それを卷きながら罠を拵へて二つ折にしたものを十七本と、別に七寸位のものを長い儘で卷いたものを六本必要と致します。

編　針　角製スピン用鈎針。

實　習

葉——葉色のスピンで鎖を百五十拵へて葉用の針金として卷いたものゝ一番長い針金を初めから編み込みつゝ、帽子編を一つして次は長編を次第に長くして三目編み、次から二重搦の長編で其の鎖の終りから十五目手前の處迄編んだら五目斗りは短かく編み、次からは長編にかへて段々に短かく五目編み、次を長編の拔出で二目編ん

て次から帽子編で終り迄編む、而して鎖を五つ拵へて端から帽子編で其鎖を編み終つたら片側の出來上りとなります。其處からは今迄編み入れて來た針金を折り曲げてこれから編む片側の方へ編込みながら前と同じ格好になる様、今迄の編方の順序を逆に編んで行くと完全な一葉が得られます。同様の方法で左の目數のものを編んで下さい。

葉

鎖の目數	葉數
百五十	一枚
百三十	一枚
百十	一枚
百	二枚
八十	一枚
六十	一枚
五十	一枚

花　大辨を編む——白のスピンで鎖を四十拵へて帽子編を一つして、次からは短かい長編で其鎖の終から十三手前の處で二重搦の長編にして急に長くなる様に三目編み、次は三重搦の長編にして終りまで編む、終りの目には少し短かくなる様に三つ編み入れる、次は二重搦の長編を二つ編み、鎖を三つ拵へて其目に帽子編で止める、其處から瓣用の罠のある針金を持ち添へて編み入れるのでありますが、以上によつて瓣の半分が出來たのでありますから、左側を今の片側と同様の方法で逆に終り迄編んだら一旦糸を切つて置く、それから瓣用として準備して置いた長い針金を今編み込んだ針金の罠の中へ通して持ち添へ、右の下の編初めの處に糸を付けて其針金

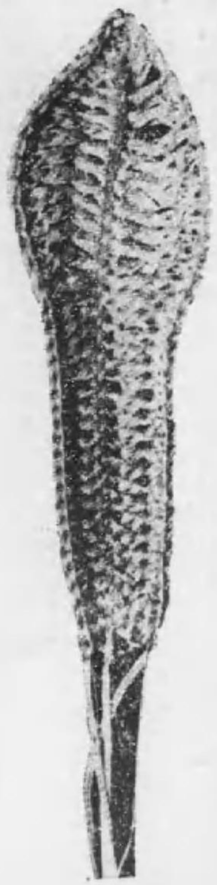
を編み込みながら、帽子編で其周圍を一回編むと終了となります。寫眞を參照して同様の大瓣を三枚拵へて置く。

大瓣

中瓣を編む——白のスピンで鎖を三十五拵へて短かい長編で其鎖の端から十五目手前の處迄編み、其處から少し中脹れになる様に二重搦の長編にして終りの三目手前迄編み、それからは長編で短かく編んで終りの目には一目に長編を三つ編み入れ

も、其處からは罠のある針金を編み入れながら前同様の編方を逆に編んで行つて一旦糸を切る、次は其周圍に大瓣と同じ様に長い方の針金を入れつゝ帽子編で一回編み廻つて置く、これも大瓣と同じ様に三枚の瓣が要ります。

中瓣



蕋瓣——白スピンで鎖を三十三拵へて中瓣と同じ格好の小さいものを三枚編んで置けばよろしい。

蕾瓣——この蕾は半ば花苞に包まれて居るのでありますから其の積りで拵へて置く、先づ白のスピンで鎖を三十拵へて初めから長編で少し中脹れ

蕾瓣

になる樣に編んで、中央には矢張り罠の針金を入れて編みます、同じ形のものを三枚編んで頂きませう。

花苞　この花苞は前項に御座いましたアマリリスの場合と同樣でありますから參照して御編みになればよろしいのでありますが、こゝに再記して置きませう、それは白のスピンで鎖を三十拵へて其の鈎針を後に返して帽子編を一つ編み、次からは急に長編を長くして二目編み、次は二重搦の長編でなるべく長くして二十目編む、次からは長編にかへて段々に短かくして行つて終りまで編み、終りは長編を三つ入れて針金を入れつゝ前の片側と同じ格好になる樣、今迄の編方の順序を逆に編んで行けばよいのであります。同じものが四枚要ります。

花苞

染色法

器具材料準備

繪具	葉染料。ピオレット。ローダミン。レモンエルロー。
染溶器	茶碗三個。
筆	繪具筆三本。
乾紙	古新聞紙少々。

實習

花苞＝＝葉染料を淡く溶いて花苞を染めて新聞紙の上で乾かす。

大中瓣と蕾瓣＝＝花を染めるには初めはピオレットの稍々濃色のものに少量のローダミンを筆先に付けて混ぜ溶き、一瓣宛花瓣の上半分を染液に浸し染めますと、其染液が下方へ浸みて暈かしになります。

新らしい染溶器にレモンエルローを入れ、それに極少量のグリーンを筆先に付けて淡綠色の染液を作ります、而して各瓣の下部を一枚宛染める樣にして以前上部を染めた時の色と突き合はぬ樣に心懸け、叮嚀に筆先で捺染して置きます。

組立法

材料準備

卷　糸　淡綠色少々。
針　金　亞鉛線少々。
添　竹　ヒゴ竹少々。
卷　紙　美濃青色紙。

實　習

開花の組立——先づ中瓣を三枚向ひ合せにして一纏めに持つて、瓣の下を卷糸で緊く三分位卷き下り　其處へ蕋瓣三枚を中瓣に添へて卷き付け、又三四分卷き下つて大

瓣を蕋瓣と重なる樣に付け添へ、其下方を三分計り卷き下つたら花苞を二枚胞き合せに付け搦み、尙其下を粗らく卷いて其糸を切る、それからヒゴ竹と亞鉛線とを添へて適當の太さにして切り揃へて置く、其上を卷糸で叮嚀に五寸位卷いた處へ六十の鎖で編んだ葉を表を內にして搦み付け、再び其卷糸の卷き終りから下を青紙で卷いて置きます。これで開花の組立が出來ました。

蕾の組立——前にも申ました樣にこの蕾は半ば花苞に包まれて居るので御座いますから、蕾瓣三枚を表を內に向ひ合せにして持ち、それを指先で寫眞の樣に捻ぢて下さい、而して其編み餘りのスピンと針金とを卷糸で二分計り卷き下つて花苞を抱き合せにして卷糸で搦み止め、開花の塲合同樣適當の花抽を作つて、再び其上を卷糸で苞の際から四寸位卷き下つた處へ五十の鎖で編んだ葉を一枚搦み付け、猶五寸

蕾

花菖蒲

終了の寫眞

計り卷き下つて置く、次は開花の時の樣に青紙で卷き終りから下を卷き止める。

それから殘つた葉は長短を程よく組合せて花瓶に挿して御覽なさい、其の優雅なる清姿は眺め盡せぬ風情があります。

8　牡丹

この花は高さ三尺乃至六尺にも達して多くの枝を分ち、直徑一尺にも近い大輪の花を開く、春其の枝頭に紅い芽を發して新らしい枝を抽いて葉を生じます、凡百の花卉中花容の富麗なることは恐らくこの花の右に出ずるものはあるまいと思ひます。

（特　徴）

葉　羽狀重複葉で互生す、葉面は平滑で長い柄を具て居る、小葉片の下部は全緣で上部は往々分裂して長楕圓形をなして居ります。

花　瓣の數は十餘枚あつて、其の形は倒卵形で邊緣に不齊の鋸齒を具へて居る。

萼　圓形の萼片五枚より成る。

萼苞　萼の下に狹い苞が御座います。

蕊　雄蕊が多數あつて葯は黄色であります。

花盤　薄い肉質の盞狀となつて三四個の子房を包圍して居ります。

編　法

器具材料準備

編　糸　葉色スピン二反。時色スピン二反。

卷　糸　淡綠色二反。白少々。

針　金　銅線少々。

（針金卷）葉用として銅線を六寸位のものに百十六本切り、罠にして二つに折つて綠色の卷糸で卷いて置く。又蕚用として同じ長さの罠のある針金を四十本拵へるのと、別に六七寸の針金を長い儘で卷いて置いて下さい。

瓣用には一尺位の長さのものに三十一本切つて長い儘で卷く。それから別に同じ長さの針金を六十八本切つて葉の針金の樣に二つに折つて罠を拵へて卷いて置く。

編　針　角製スピン用鉤針。

實　習

葉　重複葉＝＝葉色のスピンで鎖を三十五拵へて端の一つを帽子編にして、次は長編の拔き出を一目編む、次は長編で次第に長くして參りまして七目編み、次は二重編の長編で次第に長くして最終の十五目手前迄編んで行つたら、又鎖を八つ拵へて端の二つを帽子編に、次は長編で漸次に長くして五目編み、次は短かい二重搦の長編で其の鎖を終る迄編んで參りまして、初めの二重搦の長編で最終の三目手前の處迄編んで參りまし次は眞の鎖に編み移つて短かい二重搦の長編で編む、而して又鎖を三つ拵へて逆して、其の處で長編の拔出をして最終は帽子編で編む、而して又鎖を三つ拵へて逆の目を取り、帽子編で前の最終の帽子編の處迄編んで參りましたら、其處で針金を持ち添へてそれを編み入れながら前の片側の塲合と同樣の形になる樣に編んで參ります、これで寫眞の樣に中央部の終了となりました。

新たに其の左側の端の處に糸を付けて針金を編み入れつゝ端から二目帽子編を編

み、次は長編で五目編んで次からは二重搦の長編で少し中脹れになる樣に心して最終の五目手前の處迄編み、次は長編を三目編み次は帽子編で最終迄編んで行つて右側に編み移ります、其處で針金を持ち添へてそれを編み入れつゝ前同樣を逆に編んで參りますから、葉（其一）を參照して三十五の鎖を拵へて編んだものを十六枚作つて置いて下さい。

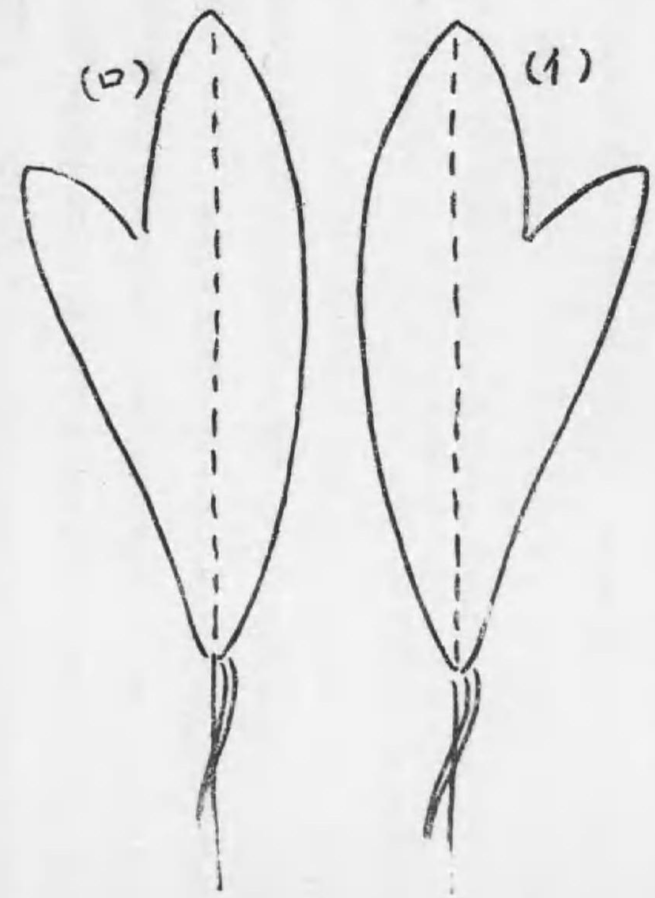
葉　（其一）

次は鎖三十を拵へて初めは前葉の場合と同樣の編方で最終の十二目手前の處迄編んで參りまして、其の處で鎖八つを拵へて端の一つを帽子編で編み、次は長編を三目編んで其次は短かい二重搦の長編で其鎖を終る迄編んで行く、而して以前の二重

搦の長編の中央の處に帽子編で止め、眞の鎖の處に編み移つて短かい二重搦の長編で最終から三目手前の處迄編んで參ります、それから長編にして終りの目は帽子編にする、其處で鎖を三つ拵へて逆の目を取つて帽子編で其の目を編み終つたら、前の鎖の最終の帽子編をした處に帽子編を一つ編んで針金を編み入れながら長編を三目編み、次は二重搦の長編で少し中脹れになる樣にして最後の五目手前迄編んで參ります、其處からは長編で次第に短かく編んで行つて最終は帽子編で止めます。

次は新たに以前の編み初めの處に糸を付けまして、針金を入れながら帽子編を一つ編み、次からは初めは短かい長編で次第に長くなる樣に編む、而して中央からは又短かく編んで參りまして最終は帽子編で止めます、これで葉（其二）のイロ二樣の葉が出來ました、この葉は誠に不規則な葉で御座いますから、上述の方法によつて幾分か手加減して同じ大さ形態にならぬ樣にするがよろしい、兎も角も三十の鎖で編み初めて變態の葉（イロ）二種の形狀を參照して左右共十七葉宛拵へて置く。

葉　（其二）



||||最初(イ)鎖四十五を拵へて端の一つを帽子編にして次から長編で順々に長くして十目編み、次は二重搦の長編で終迄編んで參ります、又鎖八つを拵へて端から三目飛ばして四つ目の處に長編を編み入れる、次は二重搦の長編で八つの鎖を終る迄編んで、初めの四十五の鎖の端の

目に帽子編で止め、(イ)の片側の終了となつたら針金の一端に罠のある方を右にして持ち添へ、其の針金を編み入れなから前に編んだ長編の形と同じ形になる樣に以前の編み方を逆に編んで瓣中の(イ)部を編み終る。

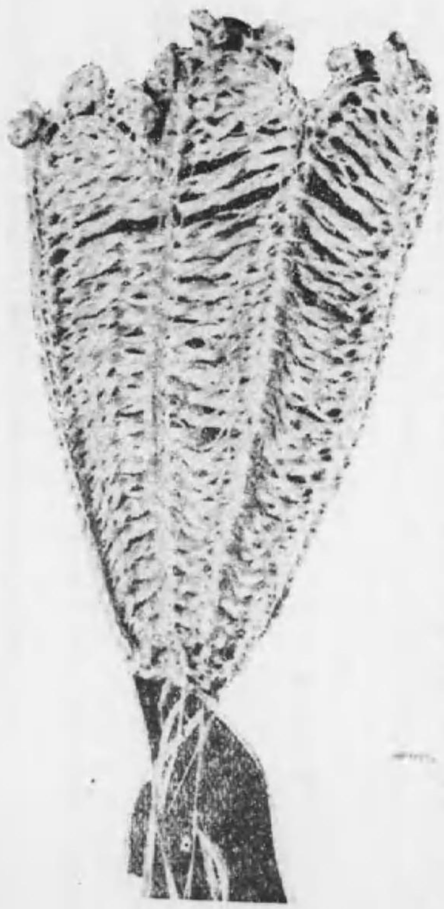
次は(ロ)新たに(イ)の左側の上部から五目位下の方の處に糸を付け、鎖を八つ拵へて罠の針金を編み入れながら(イ)の八つの鎖を拵へたときと同樣に端から三目飛ばして四つ目の處に長編を編み、次から二重搦の長編にして八つの鎖を編んだ

瓣　(イ)部

ら、尙ほ其儘で最下方の處から十目位手前の處迄編んで參ります、次は普通の長編に替へて次第に短かく編んで最終を帽子編にすると(ロ)部の片側が出來る事になる。次は長い針金を前の針金の罠の中に通して新たに編み初めの處に糸を付け、其針金

を持ち添へてそれを編み込ながら帽子編で右側上部の端の處迄編んで參ります、而して其の處から鎖を五つ拵へて逆の目を取つて長編で其の鎖を終る迄編み、前の目を一つ飛ばして次の目に帽子編で止め、又鎖を五つ拵へて前同樣に編む、それから

瓣　（口部）



瓣の上部の山になつて居る部分へ、前述の方法によつて同樣のものを三つ一山に編み付け、次からは帽子編で凹んで居る部分の鎖の端と針金の罠の中に鈎針を通して帽子編を編み、又四つ斗り帽子編をして又前同樣に編む、かくして其三山共出來ましたら帽子編で下迄編んで參ります、この

方法で左に示した目數のものを編んで置く。

鎖の目數	瓣數	
四十五	七枚	大瓣
四十	六枚	同
三十五	五枚	中瓣
二十五	四枚	内瓣
二十	三枚	同

蕾＝＝時色のスピンで鎖を三十拵へて其の針を後に返し、帽子編を一つして次は長編の拔出をする、次からは長編を段々に長くして五目編み、其次からは二重搦の長編で其鎖の終りの處より五目手前まで編んで行つたら、長編に替へて段々短かくなる樣にして終りの目は短かい長編を三つ編み入れながら針金を持ち添へ、其の針金を編み入れつゝ前同樣に編んで一旦糸を切る。

次は其上部の端の處から左側の七目の處に糸を付け、針金を編み込みつゝ帽子編を一つして次からは段々に長い長編を五目編み、次は二重搦の長編で終りの五目手前迄編み、次は長編て次第に短かくして終りは帽子編をして向ふ側に編み移り、左側の様に編んで又糸を切つて置く。

蕾瓣

次は其周圍に長い針金を編み入れつゝ帽子編で一回して糸を切ると蕾の一瓣が出來ますから、これと同様の方法で次に示す瓣數を作つて置く。

鎖の目數	蕾瓣數
三十三	三枚
二十三	三枚

蕚　苞

蕚＝＝＝緑色のスピンで鎖を二十三拵へて端の一つを帽子編とし、次は長編を二目編んで次は二重搦の長編を二目編み、それからは三重搦の長編で最終の五目手前迄編む、而して又二重搦の長編を三目して最終の目には普通の長編を三つ編み入れる、其處からは罠のある針金を編み入れて前同様の編方を逆に編み進んで一旦糸を切り、新たに其の編み初めの處に糸を付けて、周圍に入れる長い針金を持ち添へ、それを編み入れつゝ、其周圍を一廻りすると一つの蕚が出來ます、同様の方法で五つの蕚を拵へて置く。其形態は恰度蕾瓣の小さいものと同じものが出來るのであります。

蕚苞＝＝＝緑色のスピンで鎖四十を拵へて端の一つを帽子編とし次は長編の拔出を三目して次からは短かい長編で五目編みましたら、段々に長くして七目編み、次は二

重捌の長編で中脹れになる様、最終から七目手前の處まで編み、次からは長編を少し宛短かくして參りまして、終りの目には短かい長編を三つ編み入れます。これで片側の終りとなりますから其處で針金を入れつゝ、前同様を逆に編んで終了となる、同様の方法で編んだ蕚苞を十枚拵へて置きます。

染色法

器具材料準備

繪具　葉染料。ローダミン。
染溶器　茶碗二個。
筆　繪具筆二本。
乾紙　古新聞紙數枚。

實習

蕚苞——染溶器に水を入れて少しの葉染料を入れて淡緑色の染液を溶いて、蕚苞を一つ宛染めて新聞紙の上に乗せて乾かす。それから新らしい染溶器にローダミンを淡く溶いて筆に浸して蕚苞の中央部に標本を參照して捺染する。

瓣と蕾瓣——瓣と蕾瓣の下方中央部を濃色のローダミンの染液で標本通りに捺染して下さい。

組立法

材料準備

卷糸　淡緑色。濃緑色。
針金　亞鉛線。
添竹　とゴ竹。
卷紙　美濃青色紙。
蓋　二把。

實習

葉　重複葉の組立——先づ綠色の卷糸で各葉の編み餘りのスピンと針金とを一緒にして葉の際より緊く五分位卷いて置く、而して葉（其一）三十五の鎖で編んだ葉の下方二三分位の處へ、葉（其二）の不同の出來に拵へた葉二枚の下方二三分位の處を向き合せに

大重複葉

持ち添へ、卷糸で緊く三寸程卷き下つて置くのであります、この方法で同じものを三葉組立てゝ下さい。

次は前記三枚の内の一枚を中眞として其の下方二寸五分位の處へ殘りの二枚を寫眞の樣に組立ると完全な重複葉が一枚終了ります、之れと同じ方法で組立た重複葉を五枚と、殘りの單葉で初めに三枚の葉を組合せたものゝ下方一寸位の處へ單葉二枚を向き合せに持ち添へて緊く搦ん

小重複葉

で其下を卷いて置く、小重複葉の寫眞參照。

開花＝＝開花の組立を致しませうそれは蕊を中眞として其周圍に初めは內瓣の小さいものを一枚宛持ち添へて卷糸で搦み付け、其外周へ次の內瓣四枚を順々に搦み付け、次は中瓣の五枚を今付け添へた內瓣の周圍へ付け添へ、次は大瓣の六枚の方の瓣を其周圍へ搦み付け、今度は一番大きな七枚の瓣を一枚宛搦み付けて緊く其下方を卷いて置く、この花は大輪で御座います爲めに、各瓣を付け添へる度に卷糸を充分緊く引き締めて組立る樣にして下さい。

開花の組立が出來ましたら其の花輪の下方の周圍へ五枚の萼片を一枚宛表を外にして卷糸で搦み付け、次は萼苞五枚を表を內に向けて一枚宛緊く搦み付けて其下をあらく卷き止める。

次は花の下の方則ち花柄や幹となる分部一尺三寸位を拵へる爲めに、針金とヒゴ竹を少し宛添へながら適當の太さになる迄青紙で卷いて置く、而して卷糸で萼苞の

際から三寸位卷き下つた處へ、大重複葉の葉柄三寸位の處を持ち添へて一寸位卷き下り、其處へ互生に同し葉を添へて二寸斗り卷いて止める、其編糸を切つた口の部分を青紙で卷き止めて頂きませう。

蕾＝＝開花の塲合同樣初めは蕋を中心として其周圍へ小さい瓣三枚を一枚宛卷糸で搦み付け、又其外圍へ殘りの三瓣を付け添へる、次は萼片次は萼苞と云ふ樣に開花の塲合同樣に編み付けたら一旦卷糸を切つて、萼苞の際から青紙で一尺七寸位卷いて置く。而して其上を再び卷糸で三寸位卷き下つた處へ、小重複葉を付け添へて一寸五分位卷いて互生に大重複葉を持ち添へて卷く、それから一寸五分位卷き下つて又大葉を着け、尙一寸五分位下つた處へ殘りの葉を付け添へたら其下を三寸程卷いて置けばよろしい、卷糸の切れ口は矢張り青紙で卷いて置く。組立が出來たら花瓶に挿すか又は籠などに入れる都合もありますから、開花と蕾の枝を一緒にしないで別々にして置いた方が枝振を作るに便利だと存じます、組立が出來たら花の形態を整

牡　　丹

終了の寫眞

へて下さい、多くの花卉中これに並ふものとては御座いません、兎も角も且誠によつて美容富麗なる牡丹の一枝が得られます、これ等の作品は迚も編物などゝは思えぬ位の美事さで、眞に藝術的編物と云ふも恥かしくはあるまいと信じます。

第二章　レース編各種

レース編とは斯道の最高技術を現はす處のもので御座いますから、前輯にも申しました様に其精妙なものになると婦人服一着に千金を投じても客まぬと申す位、然も其の糸は九十番乃至百番と云ふ様な細いカタン糸で編むので御座いますが、本輯には其の手法の一般を御授けしたいと思ひまして、三十番のカタン糸で編んだものを寫眞に撮つて初學者の參考に供することに致しました。

それから又レース編中一ヶの花形の模様を編み作る場合、其輪廓又は一部の高低を現はす爲めに眞糸と稱へまして、紡績の九本撚位の糸を其の部分に編み込むことが御

座いますから、其邊のことなども心得て置かねばならぬ要件の一つとして御記憶を願ひます、猶このレース編の場合に或る一定の寸法中に種々な模様なり花形なりの編み現はされたものを多數に作つて置いて、それを任意の形態に鎖編で編み繋いで窓掛、クッションカバー、卓子掛、鏡掛、又は高價な夜會服などあるとあらゆるものに應用されるのでありまして、其範圍は極めて擴いので御座います、ですから少しこの道に親しみを持つて居られる方々は、是非共此の種の編方に精通して頂かねばなりません、それにこのレース編は特別の編み方があつて面倒だと云ふ方がありますが、それは何かの間違でありませう、只毛糸で編む方法を細い糸で根氣よく精密に編むと云ふに過ぎないのでありますが、併しそれには自然其人々の考案力が作品の上に現はれて參るのでありますから面白いではありませんか、それに一定の規則内に見た處不規則の樣に編んであつてもそれが誠に合理的に編み現はされて居る處に一種言ひ知れぬ藝術味のあることが伺はれます、兎も角もレース編は最高の技術であつて筆にも言葉にも盡

されぬ程の妙味が溢れて停止する處を知りません、斯樣に妙味を感受する丈それ丈け又應用の範圍が擴いと云ふことにもなるのであります、此講習錄も本輯を以て完結になるので御座いますから、此迄の樣に一つ事を幾篇も繰り返して申上るよりは、成るべく記事と寫眞を比較參照して頂く樣にせねばならぬと存じまして寫眞を多く挿入して置きました、それに記事で何段目から後に返る又先へ行くと申しても、其處には前申ました樣に不規則でありながら却てそれが合理的に編まれてあると云ふ樣に、言ひ盡されぬ部分が御座いまして、そんな微妙な點は一々説明することが出來ませんから却て寫眞を見本の積りで御覽になつた方が結局解りよい場合もあります、又多少其物に付ての御考案の御付きになる點もあり旁々斯の道の趣味を深ふすることにもなるのであると思ひますから、それ等の點は充分御研究になつて面白いものを御編みになる樣に御精勵を願つて置きます。

都手ながら御參考迄にレース編利用の一例を擧げて見ませう、それは婦人用襦袢の

袖口に付てゞ御座います、元來袖口は絹物でもモスリンでも摺り切れることの早いには誰人も致方のないものとされて居りますが、袖口の傷んだものを着て居る程吝嗇ものはないのであります、かゝる場合にこそレース編を心得て居れば即座に飾編の應用によつて、其の破れた部分を完全に防ぎ止めることが出來るのであります、モスリンの場合はゆきを五分斗り短かくして置いて、其色と同色のもの又は白で初めからレースを付けて置きますと、破れや汚れの虞れがなくて一冬は充分に持ち耐えられるのであります、又それを仕立替する時はレースを解いてから縫い目をほどきますから針穴が殘る丈けで御座います、現今織物のレースを付た肌着用の袖口が大分に流行して參りまして何れのデパートにも澤山賣出されて居りますが、それは一面に於て、前述の傷みを防ぐ意味が含まれて居ることは申迄もありません、それに經濟上から申しても以上編物によつて服裝の一部から改善されつゝある實例であることを物語つて居るのではありますまいか、

此外小供の服裝其他あらゆる家庭の要具のいろ〳〵にレース編を應用して御覽なさい、この位重寶なものはあるまいと存じます、これからの御婦人としては單になぐさみ半分と言ふ樣な考へを一掃して、眞劍味を以て要務の一つとして御研究になり、實用的方面に御利用下さいましたならば得る處も又尠なからぬものがあらうと思ふのであります。

次はレース編の便法に付て少し申述べて置きませう。それは布製の小供服又は下着等のまだ布地がしつかりして居るのに、襟廻りや袖付等が小さくて着られなくなつた場合は、其形にもよりますが襟の處から袖に掛けて切り放し、其部分へレース編で花模樣でも編み付けて順々に編みつないで行くと、ほんの僅かの手數で新しい服の時よりは一段と趣きがあつて而も珍らしい良い服が出來ます、妾は娘が一人ですから成人ざかりには春拵へた服が其秋には其用をなしません、又冬買つた服が次の冬には間に合はぬと云ふ樣になります、こんな場合にはいつも前申ました樣な方法で、いろ〳〵

と工風を凝らして一寸他に類の無い珍らしい服を拵へるものですから、よく諸姉から其新型は什ふして編むのかこの服にはどんなものを編みつなげばよいかなどゝ御相談を受けますが、それは〳〵氣のきいた服が出來上るので御座います、それから又丈なども大きくも小さくも自由自在思ふ儘になります、この便法は單に服斗りでなく洋傘などにも應用されることによりまして一層面白味を感ぜられるのであります。

終にレース編の仕上と洗濯は什麼すればよいかと申すことに付て申添へて置ます。それはレース編の出來上つた場合又は着汚れたものや編む時に汚れを生じましたものは、皆同樣に少量の漂白粉を微温湯に溶して其中に三十分斗り浸して置く、而して輕く揉でよく濯いで後に晒糊を薄く付けて、それが生乾の時分にアイロンを掛けて置いで下さい、小さいものですと普通の燒鏝で充分事足ります、この方法を仕上と申すのでありますが特に濃い浸みでも付着した時などは、其部分丈けに漂白粉を濃くして揉み洗ひ致しますとそれは奇麗に落ちます、かくして上手に使用すると幾度も洗ひが出

來て幾年も使用に堪えるのであります、こんな具合ですからレース編は誠に經濟的で一般的にこれ程重寶がられるものはあるまいと思ふのであります。

1　手提袋（其一）

器具材料準備

編　糸　カタン糸三十番手半繰。

編　針　金屬製角柄付レース用鈎針。

應用編法　帽子編、長編。二重編の長編。松編。

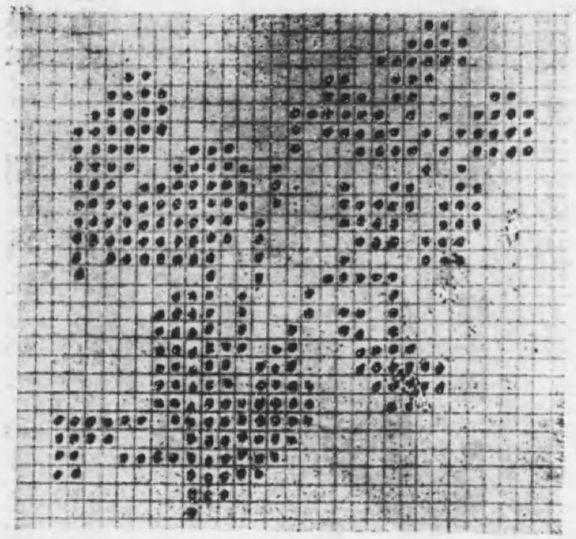
手提袋（其一）の拵方

鎖を百五十拵へて其針を後に返し、又鎖を五つ拵へて鎖の目を二目飛ばして三つ目に長編を一つ編み入れる、それから今度は鎖を二つ拵へて以前の樣に鎖の目を二目飛ばして三つ目に長編を一つ編み入れて參ります　かくして漸次に編んで一廻り致

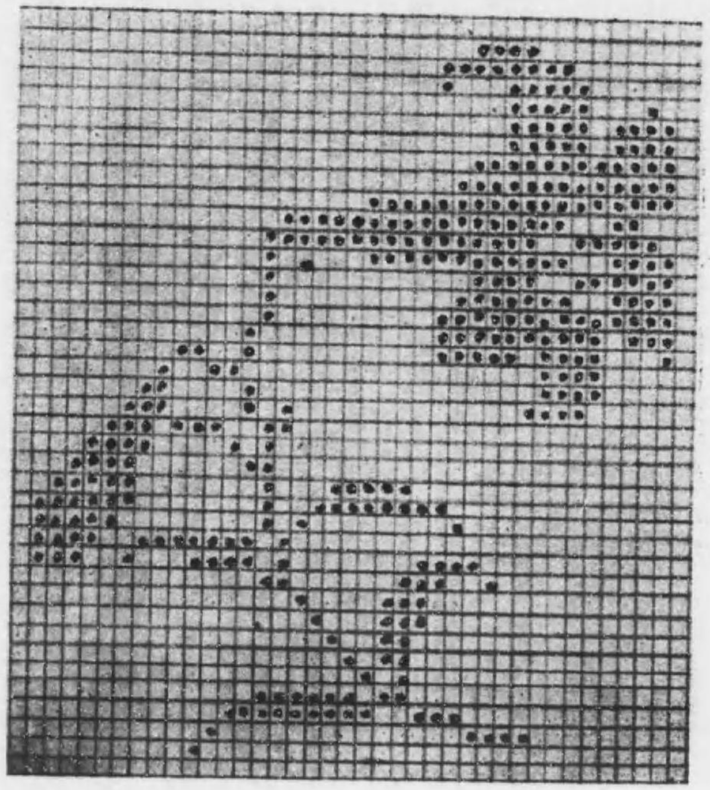
しまして百の角目編が出來ましたら、初めに拵へた五つの鎖の下から三つ目に帽子編で止めて下さい、これで第一段目は終りとなるのであります。二段目から圖案を參照して編込をして頂きませう、而して模樣の全部を編み込むことが出來ましたら、それから十段角目編を編んで置きます、次は二重搦の長編の紐通しの處を一段編んで尙其次を普通の角目編で二段編み廻つて糸を切る。

口飾——口飾になつて居る花形の編方は先づ鎖を五つ拵へて丸くして又鎖を七つ拵へて罠の中に針を通して長編を一つ編み入れ、鎖を四つ拵へて又罠の中へ長編を一つ編み入れると云ふ樣にして長編が三つ出來たら初めの

編込圖案（其一）

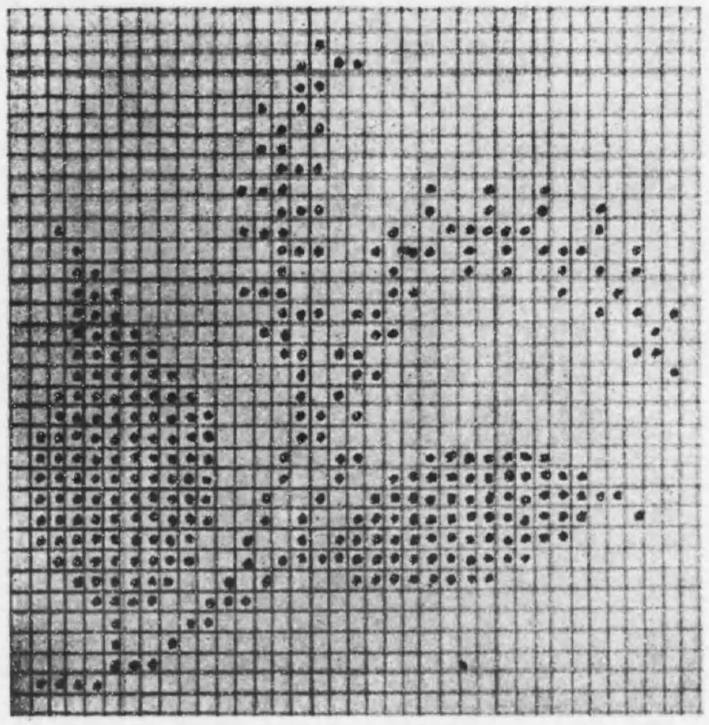


編込圖案（其二）



七つの鎖の下から三つ目に帽子編で止め、次の鎖の中に長編を七つ編み入れて前段の長編の目に帽子編で止め、又次の鎖の中に長編を七つ編み入れて、次の長編の上に止め、次は鎖の中に長編が三つ出來ましたら以前拵へて置いた袋の編み終りの段の鎖の中に針を通して帽子編を一つ編み、又花の方へ針を返して長編を一

編込圖案（其三）



つ編み入れ、又袋の方へ針を通して帽子編を編んで花の方へ編み返つて同じ處に長編を三つ編み入れて次の長編の上に帽子編で止め、次の鎖の處は長編を七つ編み入れてよく止めて糸を切つて置く。

これで一つの花形の編み付けが出來ました、この方法で花形を拵へては前の花形と袋との兩方へ編み付けながら順々に袋の口の周圍に都合十

手提袋（其一）

終了の寫眞

九の花形を編み付けて參ります、次は袋の底の部分は松編の飾を編みながら綴じ合せて置けばよろしい。それから打紐を拵へて紐通しの部分へ通して寫眞の様に結んで糸端を揃へて切り捨てたらこの袋の終了となります。

2　手提袋（其二）

器具材料準備

編　糸　純絹糸好の色五匁。
裏　地　羽二重三寸幅一尺一寸。
袋　地　馬毛製一個。
編　針　金屬製角柄付レース用鈎針。

應用編法

帽子編。長編。

手提袋の拵方

花形から編む——先づ鎖を五つ拵へて丸く罠にして其中に帽子編を十八編み入れる。二段目は鎖五つ拵へて前段の帽子編の目を二つ飛して三つ目に帽子編で止め、又鎖を五つ拵へて三つ目に帽子編で止めると云ふ樣にする、この方法を繰り返し〳〵て

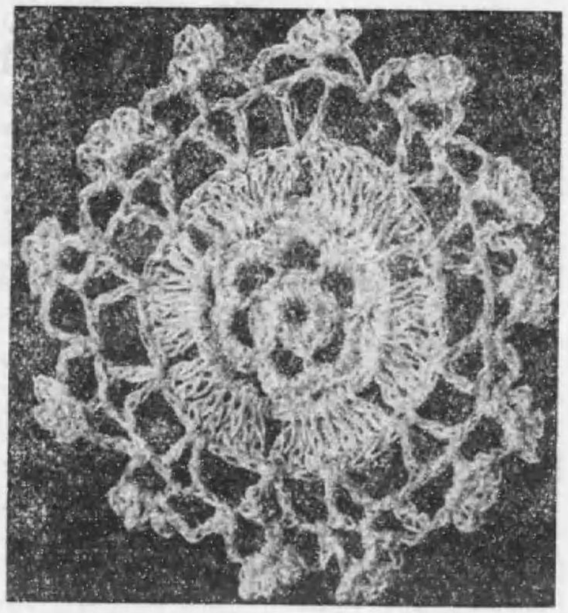
編んで行くと其周圍に五つの鎖の處が六ヶ所出來ることになります。三段目は其五つの鎖の中に帽子編を七つ編み入れて又次の五つの鎖の處へ七つの帽子編を編み入れると云ふ樣にして、繰り返し編んで又鎖を五つ拵へて前段の七つの帽子編の中の目に止め、又五つ鎖を拵へて七つの中の目に止めて行く、かくして一段編み廻りましたら次の段は其五つの鎖の中に長編を七つ編み入れ、又次の五つの中にも七つ編み入れると云ふ樣にして一段編み廻り、次は鎖二つ拵へて前段の七つの長編の中央の目に長編を一つ編み入れ、又鎖を二つ拵へて同じ目に長編を編み入れ、又鎖を二つ拵へて前段の七つと七つの間の處に長編を一つ編み入れ、鎖を二つ拵へて又長編を同じ目に一つ編み入れる、此方法で一段編み廻りまして鎖を五つ拵へて前段の鎖を二つ拵へて下の目を三目飛ばした處へ帽子編で止め、又鎖を五つ拵へて前段の次の鎖の處に帽子編で止め、其針を今の五つの鎖の中に通して帽子編を一つ編んで鎖を三つ拵へて其中に帽子編で止め、又鎖を三つ拵へて其の鎖の中に帽子編で止め

る、かくして三回止めましたら鎖を五つ拵へて次へ移り編む、この方法を繰り返して一段編みましたら一つの花形が出來ますから一旦糸を切つて下さい。

同様の花形を八つ拵へるのですが其終りの段の時に二ヶ所丈けを前の花形に繋ぎ合せながら編んで行くのであります、而してそれが丸く罠になる様に編み繋いで下さい。

次に其周圍を鎖五つ拵へて寫眞の様に止め、又鎖を五つ拵へて次へ止めると云ふ様にして一廻り出來ましたら、次からは其五つの鎖の中に又鎖を五つ拵へて止めるのであります、此編み方で十二段して止めて下さい。殘りの

花形



一方も同様にして十二段編みましたら次は紐通しを作ります。

紐通し——これは鎖を六つ拵へて前段の鎖五つの處へ長編を一つ編み入れ、次から三つ鎖を拵へて次へ長編を一つ入れると云ふ様にして一段編んで、次は其三つの鎖の處に帽子編を三つ宛編み入れて一段編み、猶一段帽子編で編んで鎖を七つ編んでは前の長編の二つ目に止め、又鎖を七つ拵へて二つ目に止めて一回編み廻り、次は其鎖の中に帽子編

手提袋（其二）

終了の寫眞

を九つ編み入れて一回編み廻つて糸を切る。

次は馬毛(もうせい)製の袋の口の部分に以上終了たものを縫ひ付けるのでありますが、其の縫ひ付ける處は二段編んだ帽子編の處を縫ひ付けて置けばよろしい。

紐——糸を縄にして二本拵へてそれを紐通しの部分に通し、其両方に出て居る紐端をよく結び止めて置く、而して尚ほ其糸端を一寸位殘し切つて終了となるので御座います。

3　手提袋（其三）

器具材料準備

編糸　カタン糸三十番手少々。

布地　袋生地幅七寸長一尺一寸。

編針　金属製角柄付レース用鈎針。

應用編法　帽子編。長編。鎖編。

手提袋(其三)の拵方

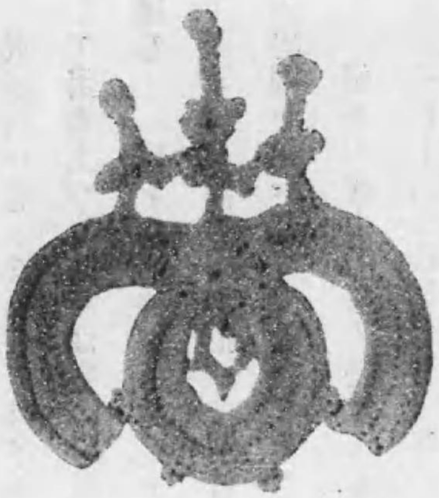
中央の桐形から編む——鎖を五つ拵へて丸く罠にして止めたら其罠の中に長編を二十五編み入れて又初めの處に止め、鎖を五つ拵へて次の目を一つ飛はして次の目に止め、又其次の目に帽子編を一つして鎖を十三拵へて其五つの鎖の處を二重になる樣に挾んで次へ帽子編で止め、又針を返して其の十三の鎖の處に帽子編を四つ編んで鎖三つの玉を付け、又帽子編を二つ編んで鎖三つの玉を付け、次は帽子編を四つ編んで初めの長編の處に帽子編て止め、又鎖を二十二拵へて持ち替へて前の十三の鎖で出來たものゝ上を三重になる樣に挾んで次に帽子編で止め、又持ち替へて初めは帽子編次は長編の拔出し次から長編と云ふ樣に其の鎖の中に三十五の長編を編み入れて前の二十五の長編の處に止め、持ち替へて鎧編になる樣に帽子編で二段編み、終りの段は鎖三つの玉を四つ付けて置

きますと下の中央の處が出來上りますす、次は鎖を二十拵へて寫眞を參照して下部の玉の次へ帽子編で止め、次から長編を三十三編んで初めの二十五の處に止め、又持ち替へて其の長編の上部を鎧編になる樣に二段編みますと、向つて右側が出來上ることになります、左側も同樣の方法によつて編み終りましたら、上方の花の處を編むことに致します。

五三の桐の形になつて居る右側の中央から九目の處に糸を付けて鎖を六つ拵へ、其針を三つ目に通して長編の上部を拔かぬものを五つ拵へてそれを一時に拔き出して元の目に止め、又鎖を七つ拵へて其の針の處から三つ目に針を通して前同樣の玉を二つ並べて編み付ける、これを上部と致しますから次からは下へ編み下つて參ります、前の鎖の處へ帽子編を三つ編み入れて前と同樣に玉を編み付け、又下の鎖の處へ帽子編を三つ編み入れて次から下の目を七目編んで三つの花の分は終りとなります、此度は中央の五つの花を編むのでありますが、三つの花の場合と同樣ですが

此度は以前のものより二つの花を多く編み付けると云ふ丈の違で御座いますから寫眞を御參照下さい、而して三つの花を編み付けましたら次は中央に五つ左右に三つの花を編み付け、寫眞の樣に五三の桐の紋樣のものを編み付ける、この方法で二つの紋樣を拵へましたら袋の表と裏とへ寫眞で御覽の通りの位置に叮嚀に縫ひ付けて頂きませう。

桐形



輪つなぎ——新たに鎖を二十五拵へてそれを丸く罠にして帽子編で一廻りに四十位編み入れる、次は其外廻りに長編が四十二出來る樣に編み入れて下さい、それから今度は鎖を三つ拵へて玉を拵へ次を三目編んで又鎖三つの玉を編む、かくして周圍に鎖三つの玉を十四ヶ所編み付けて置く。これを第一の輪と致しませう。

第二第三の輪を編みながら寫眞を參照して輪と輪の間を鎖編みで編み繋いて參ります、此繋ぎ方法を詳細に記述したいとは存じますが、諸姉も餘程御練達なさいました様ですからこれ位の事は寫眞さえ御覽になれば御編みになれる事だと存じまして茲に其説明を省きました、終了りましたら寫眞の様な位置に綴じ付けて下さい。

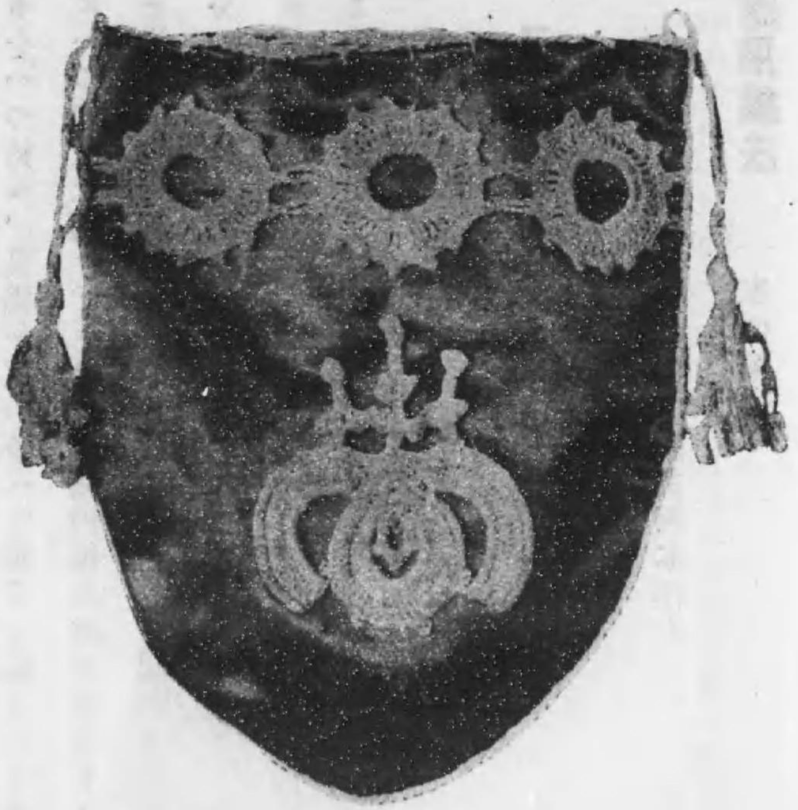
かくして出來上つたものは袋の兩面へ綴じ付けるので御座います。

紐通し——鎖を七つ拵へて其鎖が少し垂れる氣味にして布地の袋の口の部分へ帽子編で止め、又鎖を七つ拵へて同様の方法で次へ次へと順々に編み止めて行つて袋の口の周圍を編み廻つて置いて下さい。

紐——紐糸の繰りの儘の長さのものを三十本程切り取つてそれを二つに分けて繩に撚る、それを二つに切つて二筋にして紐通の部分に左右から通して其兩端に出た二筋の紐端を小間結にして置く。

別に同様の方法のものを拵へて袋の周圍の表と裏とに寫眞の様に綴じ付けて下さい。

手提袋（其三）



終了の寫眞

房の拵方——二寸五分位の長さに切つた糸を五十本位一纏めにしてそれを二つに折り曲げた處へ次の方法で編んだ編玉の房を三筋持ち添へます。其編むと云ふのは鎖を十五拵へて其處へ長編の上部を抜かない玉を一つ拵へ又鎖を三つ拵へて同様

の玉を一つ拵へ、又鎖を三つ拵へて編玉を編んだら其目に長編を五つ編み入れ尙其目に一つの玉を編む、これで片側の編み終りとなりましたからこれからは以前の編方を逆に同樣の編玉を作つて置く。而して同じものを三つ拵へて一緒にして以前の糸房の處へ持ち添へたら、二つに折り曲げた處より三分位下つた處を緊く括り締めて置けばよろしい。左右共同樣の方法で房の取り付けを終りましたら全部の終了となるので御座います。

4　半　手　套

器具材料準備

編　糸　純絹糸好の色五匁。

編　針　金屬製十四番四本棒針。

應用編法　木の葉編。

半手套の拵方

元目を八十拵へて初から二十目の木の葉編で四寸位編んで拇指の處の增方を編む、方法は其の增す所を定めて一段置きに二目宛增して行つて木の葉を編み、二つの木の葉編が出來ましたら拇指を

半　手　套

終了の寫眞

分けて編み、七八分編んだら止めて置く、而して殘つて居る方を甲の方として其處から一寸五分位編んだら止めて置きます、他は寫眞を參照して兩方共揃ふ様に拵へて下さい。

5　袖　口

器具材料準備

編　糸　カタン糸三十番手少々。
布　地　絹麻七寸幅一尺三寸。
編　針　金屬製角柄付レース用鈎針。

應用編法　帽子編。長編。

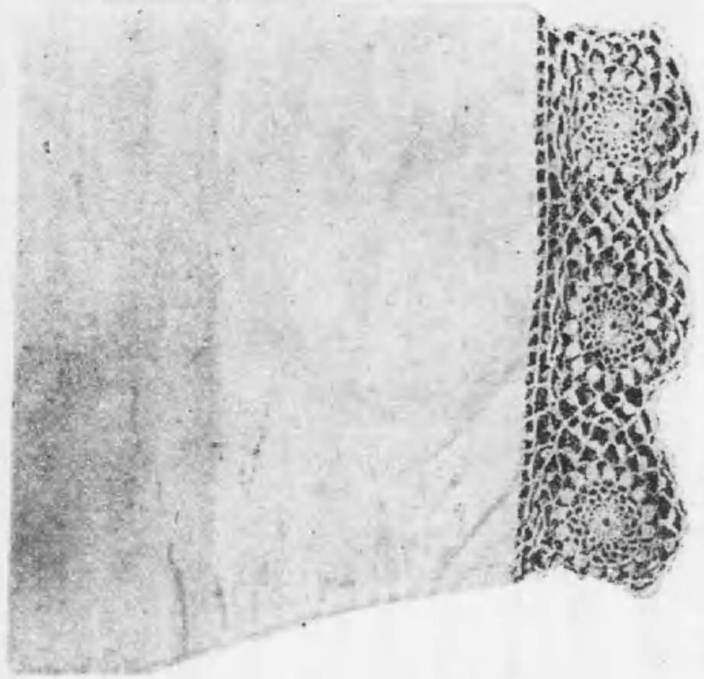
袖口の拵方

花形を編む——初めは花形から編むことにして先づ鎖を五つ拵へ、丸く罠にして其

中へ長編を十六編み入れてそれを初めの鎖の處に止めます。二段目は鎖を三つ拵へて次の目に帽子編で止めて又鎖を三つ拵へて止める、この方法を繰り返してこの段を編んで參ります。三段目は鎖を四つ拵へて編み。四段目は鎖を五つ拵へて編む。五段目は鎖を五つ拵へて次の前段の鎖の中に針を通して長編の上部丈け拔かぬものを五つ編みます、それを一時に拔き出して鎖を五つ拵へて次の前段の五つの鎖の中に同様に編み入れる、これを繰り返し編んで參りますと此段に其長編一つのものが十六出來ることになります。次の段は鎖五つを拵へて其鎖の元の目に帽子編で止めて玉を作り、又五つの鎖を拵へて次の花瓣の間の鎖の處に止めて參ります、この方法を繰り返して二段編んで一旦糸を切つて置く。

花　形

袖口



終了の寫眞

以上に依て一つの花形が出來ましたから同じ方法で六つの花形を罠になる様に編み繋ぎ、先になる方は鎖を五つ拵へて次へ止め、又鎖を五つ拵へて次へ止めると云ふ様にしてこの段を編んで行く。二段目は其鎖の中に帽子編を一ヶ所に七つ宛編み込んで一回編み廻つて止めて置く、而してそれを布地に編み付ける方は花

の時の鎖五つの中に長編を一つ編み入れ、鎖を五つ拵へて又次の鎖五つの中に長編を一つ編み入れると云ふ様にする、かくして一段編み廻つたら次の段は前段の長編の目に又長編を一つ編み入れ、鎖を二つ拵へて前段の五つの鎖の中央に長編を一つ編み入れ、又鎖を二つ拵へて次の長編の目に長編を編み入れる、この方法を繰り返して一段編みましたら終了ます、終了ましたら其編み止めた方を布地に縫ひ付ける様に致します。かくして兩袖を揃へ編むと優美で丈夫な袖口が出來るので御座います。

6　袖口（レース其一）

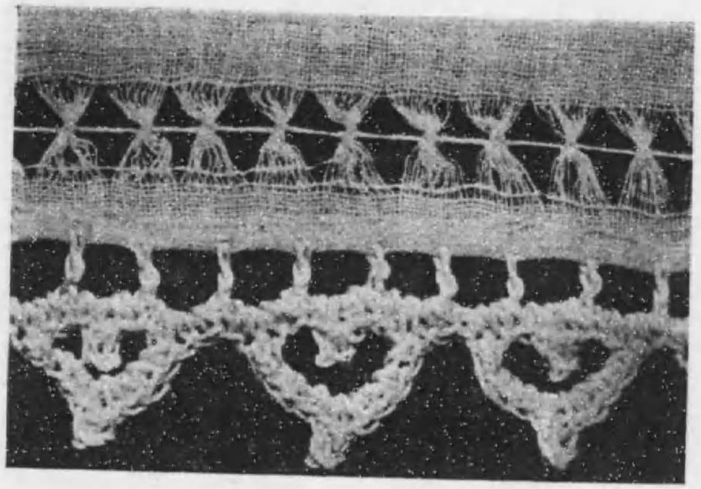
器具材料準備

編糸　カタン糸三十番手少々。

編針　金屬製角柄付レース用鈎針。

應用編法　帽子編と長編。

袖　口　（レース其一）



終了の寫眞

袖口（レース其一）の拵方

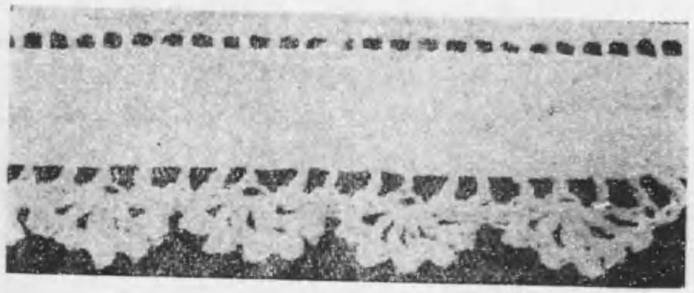
先づ袖口の端を內側へ一分位折り曲げて置いて、其五厘位の處に針を通して糸を付け、帽子編を一つ編んで鎖を六つ拵へて其三つの鎖と同樣の間隔を置いた處に針を通して長編を一つ編み、鎖を三つ拵へて又前同樣にして次へ長編を編む、同じ方法を繰り返してこの一段を編んで參ります。

二段目は其三つの鎖の處に帽子編を四つ編み入れ、又次の三つの鎖の處に

針を通して帽子編を二つ編み、鎖を三つ拵へて其帽子編の上の横になつて居る二本の糸に針を通して帽子編で止めると、小さい玉の樣なものが出來るのであります、それから又其二つ入れてある處に針を通して帽子編を二つ編み入れ、次の三つの鎖の處に帽子編を二つ編んで鎖を七つ拵へ、裏返しに持ち替へて以前に編んで置いた玉の部分を飛して次の三つ目の帽子編の目に帽子編で止め、又次の目に帽子編で止め、又次の目にも帽子編を一つ編んで持ち替へ、其七つの鎖の中に針を通して帽子編を四つ編み、鎖を三つ拵へて又以前拵へた樣な玉を作つて猶其七つの鎖の處に帽子編を四つ編み入れます、これで一つの飾編が出來ることになるのでありますから、この方法を繰り返し〳〵て寫眞を參照して順々に袖口の周圍を編み廻つて行けばよろしい、この方法を二重山飾と稱へます。

7　袖　口　（レース其二）

袖　口　（レース其二）



終了の寫眞

器具材料準備

編　糸　カタン糸三十番手少々。

編　針　金屬製角柄付レース用鈎針。

應用編法　飾松編。

袖口（レース其二）拵の方

一段目は前述（其一）の場合と同樣の方法で編み。二段目で飾松編を編むので御座いますが、それは前段の長編の上の處に長編を一つ編で、鎖三つ拵へて其長編の上の二本の糸に針を通して帽子編で止め、又長編を同じ目に一つ編み入れて鎖を三つ拵へて前同樣に編んで行く、而して其長編が六つになつて玉樣のものが五つ出來ましたら前段の長編の次の目に止めると云ふ樣にする、この方法を飾松編と稱へます、かくして一段編むと終了となるのであります。

8　袖　口　（レース其三）

器具材料準備

編　糸　カタン糸三十番手少々。

編　針　金屬製角柄付レース用鈎針。

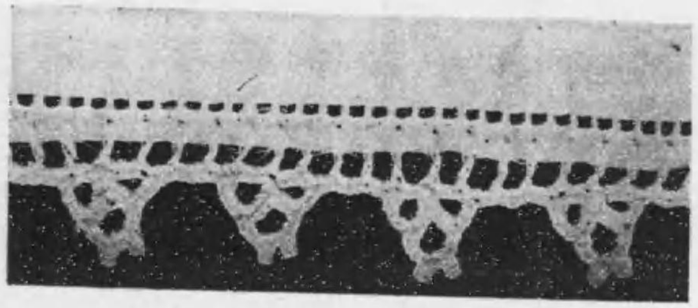
應用編法　三山。

袖口（レース其三）の拵方

此の飾編も初めの一段は（其一）（其二）の場合と同樣に編んで行くのでありますが、間の鎖を二つにして編んで下さい。二段目は其の二つの鎖の中に帽子編を三つ宛編み入れ、四つ目になりましたら帽子編を二つ編んで鎖を五つ拵へる、それから持ち替へて今編みました帽子編の三つ目に帽子編をして又鎖を五つ拵へて今止めた處か

ら三つ目に帽子編で止めます、次は又持ち替へて其の五つの鎖の中に帽子編を六つ編んで、前に鎖を止めた處に又帽子編で止めて次の鎖五つの中に帽子編を三つ編み入れ、又持ち替へて鎖を五つ拵へて前に帽子編を六つ編んだ中の目に又帽子編で止め、持ち替へて其鎖の中に帽子編を二つ編み入れて鎖を三つ拵へ、飾編其二の松の上部に付けた様な玉を拵へ、又帽子編を二つして又一つの玉を拵へて次に帽子編を二つ編み入れます、而して前に五つの鎖の中に帽子編を三つ入れてある處へ又帽子編を三つ編み入れると云ふ様にすると一つの飾編が出來るのであります、これを三つ山飾と名づけて置きませう。この編み方はレース編の場合によく應

袖　口　（レース其三）



終了の寫眞

用する方法で御座いますが、又時としては三つ山六つ山十山と云ふ様に大きく作る場合もありませう、然し何れも前述の方法によるので御座いますから後は省略して置きます。

9　レース編（其一重小松）

器具材料準備

編糸　カタン糸三十番手少々。

編針　金屬製角柄付レース用鉤針。

應用編法　帽子編。長編。

レース編（其一重小松）の拵方

鎖を十五拵へて其針を後に返して鎖の編み初めから六つ目の處に長編を一つ編み入れ、又鎖を三つ拵へて長編を一つ同じ目に編み入れ、又鎖を三つ拵へて鎖の編み初

めの目に帽子編で止めると云ふ様にすると一段目が出來ます。二段目は其三つの鎖の中に帽子編を五つ拵へて又次の三つの鎖の中に帽子編を五つ編み入れ、又次の三つの處も同様に五つ編み入れますと二段目が出來ました、此編方は二段で一つの編方を終るのでありますから、この方法を繰り返し〳〵て編んで行けばよろしいので御座いますが、編み初めは鎖の上ですから二つ目の時は、前段の初めに鎖を四つ拵へて鎖の三つの處に帽子編を五つ編み入れまして其中の處の中央に長編を一つ鎖三つ又長編一つ鎖三つと云ふ様にして、其長編の間の鎖の處が三つになりましたら、

レース編（其一重小松）

終了の寫眞

前段の編み終りの處に長編を一つ編み入れて此段の終り

となります。

次は二段目同様鎖の中に帽子編を五目宛編み入れて行けばよろしい、この方法を繰り返し〳〵編んで其兩端の鎖の處も長編の處も帽子編を四つ宛編み入れて行けば終了となるので御座います。

10　レース編（其二クローバ）

器具材料準備

編糸　カタン糸三十番手少々。

編針　金屬製角柄付レース用鈎針。

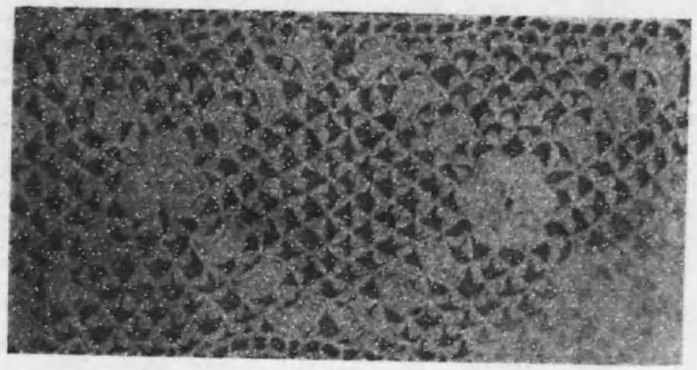
應用編法　帽子編。長編。

レース編、其二（クローバ）の拵方

クローバを編む——鎖を九つ拵へてそれを初めの目に止めて又鎖八つを拵へて次も

初めの目に帽子編で止め、又鎖を八つ拵へて同じ處に止める、次は初めの罠の中に帽子編を一つ編み、次より短かい長編で漸次に長く五目計り編んで行つて、それからは長短なく七目編み、次よりは漸次に短かく五目編み入れて又極く短かい長編にして次は帽子編を一つ編む、而して次の鎖の罠の中へも同様、又其次の罠の中へも同様に編み入れる、このときは三つの花瓣様のものが出來ます。二段目は眞になる糸を入れて初めの帽子編の處より同じく帽子編て長編の上部に編み移つて其の周圍を全部編み廻つたら次の花瓣様のものに編み移る、かくして三つの花瓣様のものを編終つたら其の眞の

レース編（其二クローバ）



終了の寫眞

糸を切る。

それより玉の付いた鎖編で角形になる様に編む、即ち鎖の五つの處を十六になる様に編んで行つて次の段よりは四つ目の角の處に增目をして九段編み續けて糸を切る。同様のものを一ヤールに付き二十位用ひますから其積りで編んで置く。

薔薇を編む——鎖を五つ拵へて丸くして初めの目に帽子編で止め、次は鎖五つを拵へて長編を今の罠の中に一つ編み入れて又鎖を二つ拵へて長編を一つ編む、かくして順次に長編を五つ編み入れましたら初めの五つの鎖の三つ目の處に帽子編で止める、次は其の長編と長編との間の鎖の處に長編を五つ編み入れて帽子編で長編の目に止めて其次も同様に致します、かくする時は其周圍に六つの花瓣様のものが出來て參ります、次は鎖を四つ拵へて今編んだ帽子編の處を横に鈎針を通して止め、又鎖を四つ拵へて同様にして一廻りする、次は以前編んだ鎖の中へ長編を七つ編み入れる、この方法は四回外になる度に長編の數を二つ增して編んで行く、而して鎖

五つを拵へて二つ目の鎖の目に鈎針を通して帽子編で止め、又鎖を五つ拵へて長編の目を四つ飛ばして帽子編で止める、其次も同様長編の目を四つ飛ばして止め、次も又同様の鎖を拵へて次の花瓣様の長編の處に飛ばして前同様に編む、即ち一つの瓣様のものゝ處に鎖を二度止めることになります、之れを一回致しましたら又其の上を同様に一回編み廻つてから糸を切つて下さい。かくして薔薇の花が出來ましたらクローバの場合同様の數を編んで置いてクローバと交るがゝに全部を編み繋いで終了となります。

11　レース編（其三車輪）

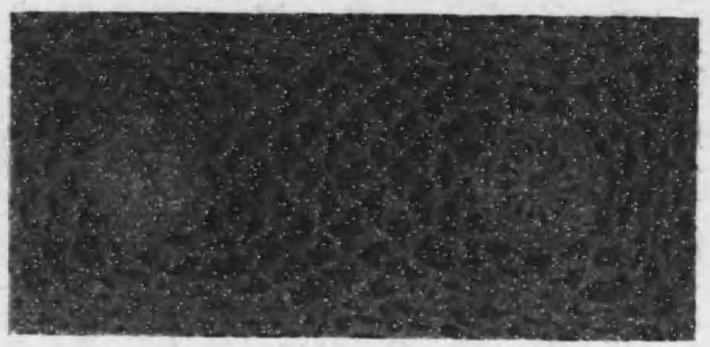
器具材料準備

編糸　カタン糸三十番手少々。

編針　金屬製角柄付レース用鈎針。

應用編法　帽子編。長編。

レース編（其三車輪）



終了の寫眞

レース編（其三車輪）の拵方

鎖を七つ拵へて丸くして其の罠の中へ帽子編を十六編み入れる、又鎖を三つ拵へて次の目に長編を一つ編み入れて鎖を二つ拵へて次の目に長編を一つ編む、かくして一廻り編んで次よりは眞になる糸を編み込ながら帽子編を二回編み、次よりは鎖五つに玉を付けたもので編んで行く即ち帽子編の目を三つ飛ばして編み廻り尙ほ二回編み廻つて置く。それから一方の花形は前項の薔薇を應用て適當の數を拵へて頂きませう。

繋ぎ合せをする方法は前例がありますからそ

れを參照して隨意に工夫せられたらよろしい、諸姉もレース編には餘程精通せられたことゝ存じますから茲には其説明を省くことに致しました。

12　レース編（其四大正）

器具材料準備

編　糸　カタン糸三十番少々。

編　針　金屬製角柄付レース用鈎針。

應用編法

帽子編。長編。七寶編。

レース編(其四大正)の拵方

鎖を二十二別に鎖を五つ拵へて初めの二十二の鎖の終りの目に長編を一つ編み入れ、又鎖を二つ拵へて鎖の目を二つ飛ばして長編を九つ編み入れ、又鎖を二つ拵へて二目飛ばして長編を一つ編む、次は七寶編を一つ編んで終りは長編を三つ編んで置く、

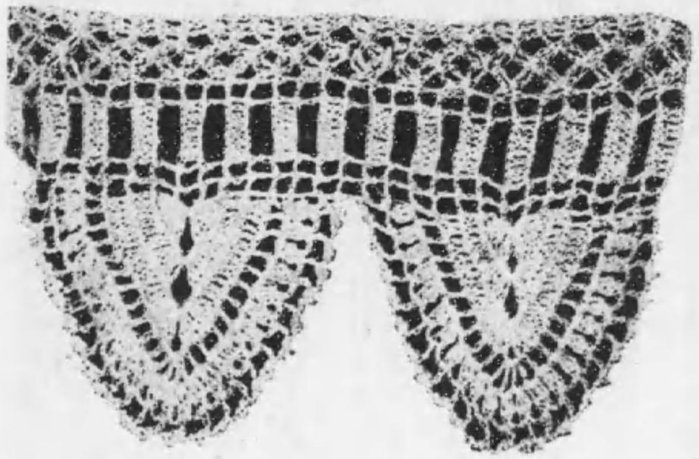
二段目は初めは長編を三つ編んで七寶編を一つ編み、同次は鎖を二つ拵へて長編を前段の長編の上に一つ編み入れ、又鎖を二つ拵へて前段の九つの長編の端の目に又長編を一つ編み入れ、鎖を七つ拵へて前段の九つの長編の終りの目に又長編を編み入れます。三段目は一段目と同様に編み。四段目は二段目と同様に致します。この方法を繰り返し〳〵て七段目の終り迄編んで參ります。八段目は其編み終りの處で飾り編に大正飾を編み付けるのでありますが、之れは幾分編方が面倒になりますから其の積りで御編み下さい。

飾編をするには只今の編み終りの處を其儘で七段目の初めの鎖の處に鈎針を通し、長編を七つ編んで鎖を五つ拵へて同じ處に長編を七つ編み入れる、それから其鈎針で六段目の終りの處に帽子編で止め、鎖を二つ拵へて五段目の處へ帽子編で止めると八段目の終りとなります。九段目は其の長編七つの上を一目に一つ宛長編を編み入れまして五つの鎖の處になりましたら、其鎖の中に長編を五つ編み入れて鎖を七

つ拵へて其處へ長編を五つ編み入れます、又前段の七つの長編の上を同じく一目に一つ宛の長編で編んで參りまして、次からは七段目同樣に編んで參ります。

十段目も初めは八段目の場合と同樣に致しまして、飾編の處は前段の長編の處を全部長編で編む、而して中央の鎖七つの處になりましたら其の鎖の中に長編を七つ編み入れ、鎖を三つ拵へて又七つの長編を編み入れます、次からは又長編の上を長編で編んで行つて四段目の端に帽子編で止め、鎖を二つ拵へて三段目の端に止めて終りとなります。十一段目は飾

レース編（其四大正）



終了の寫眞

り編の處の長編の目を一つ飛ばして、鎖を二つ拵へて長編を一つ飛ばして、鎖二つ拵へて長編一つを編むと云ふ樣にして漸次（だんじ）に編んで行つて中央の鎖三つの處に參りましたら、鎖二つ長編一つの編方を四回編み入れて次から又前同樣に編み飾編の處を終りましたら、それからは九段目の場合と同樣に編んで參るので御座います。十二段目は初め十段目と同樣に編んで飾編の處へ行つたら長編の上部を拔かずに三つ編んでそれを一時に拔き出し、鎖を三つ拵へて次の鎖の處に又長編の上部を拔かずに三つ編み入れて參ります。かくして端迄編んで參りましたら二段目の處に帽子編で編み付け、鎖を二つ拵へて初めの鎖の處に帽子編で止めます、十三段目は飾編の處から鎖二つ長編一つ鎖三つを拵へて、其の長編の上の處に帽子編で止め、又鎖を二つ拵へて次に長編を一つ編み入れます。かくして其飾編の處を終りましたら一段目と同樣に編む、これで一つの飾編が出來たのであります、この方法を繰り返し〳〵し編んで行けばよろしいので御座います。

13　レース編（其五松山）

器具材料準備

編　糸　カタン糸三十番手少々。

編　針　金屬製角柄付レース用鈎針。

應用編法　帽子編、長編。

レスー編（其五松山）の拵方

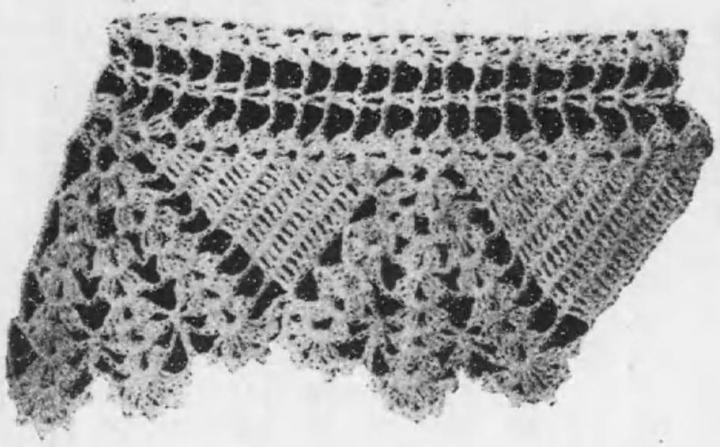
鎖を三十五拵へて初めの處から四つ目に長編を二つと鎖一つ長編を二つと云ふ様に編み入れ、鎖を三つ拵へて下の目を三つ飛ばして長編を一つ鎖一つ長編一つと云ふ様に同じ目に編み入れ、鎖を三つ拵へて下を三目飛ばして長編を三つ鎖を二つ長編を三つ編み入れ、鎖を五つ拵へて持ち替へて次の段に編み移ります。二段目は其の鈎針を前段の長編六つの中の二つの鎖の處に又長編を三つ鎖二つ長編を三つと云ふ

様に編み入れ、鎖を三つ拵へて長編二つの間の處に又長編を一つ鎖一つ長編一つと編み入れ、鎖を三つ拵へて前段の長編四つの中の鎖の處に、又長編を二つ鎖二つ長編二つと云ふ様に編み入れます、而して端は長編一つ編んで三段目に移るので御座います。三段目に移りましたら鎖を三つ拵へて前段の長編四つの處に又長編二つ鎖一つ長編二つと云ふ様に編み入れ、鎖を三つ拵へて前段の長編二つの間の處へ又長編一つ鎖一つ長編一つと編み入れまして、鎖を三つ拵へて前段の長編六つの中の鎖の處に又長編を三つ鎖二つ長編三つと編み入れ、鎖を三つ拵へて一段目から二段目に移る時の五つの鎖の中に、長編を三つ鎖二つ長編三つ鎖二つ長編三つと云ふ様に編み入れて編み初めの鎖の六つ目に帽子編で止めます。四段目は其の鈎針で前段の長編三つの間の二つの鎖の處に長編を三つ鎖二つ長編三つと云ふ様に編み入れ、鎖を三つ拵へて次の前段の長編三つの間の鎖に長編三つ鎖二つ長編三つを編み入れ、鎖を三つ拵へて前段の長編三つの上の目に長編を三目編み入れ、間の鎖の處に長編

を三つ編み入れ、鎖を二つ拵へて又長編を三つ編み入れ、鎖を三つ拵へて長編の二つの處へは前同様二つ編み入れ、又鎖三つ拵へて次の長編四つの處は又四つと云ふ様に編んで參ります、これからは同様の方法を繰り返し〳〵て編むので御座いますから省略致します。

五段目は鎖を三つ拵へて次の長編四つの處も又次の長編二つの處も同様に編んで參ります。それから鎖を三つ拵へて前段の長編三つの間の鎖の處に長編を三つ編み入れ、鎖を二つ拵へて同じ處に長編を三つ編み入れます。それから前段の長編の上を其の目のある丈け長編を編み入れ、鎖を三つ拵へて前段の長編六つの間の鎖の處に又長編三つ鎖二つ長編三つと云ふ様に編み入れ、鎖を三つ拵へて前段の長編六つの間の鎖の處に又長編三つ鎖二つ長編三つを編み入れ、鎖を三つ拵へて次の六つの長編の鎖の處に長編三つ鎖二つ長編三つと云ふ様に編み入れまして、初めの鎖の目を五つ飛ばして六つ目に帽子編で止めます。六段目は持ち替へて前段の長編六つの

レース編（其五松山）



終了の寫眞

中の鎖の處に、又前同様のものを編み入れ、鎖を三つ拵へて次も前同様に六つの長編の間の鎖の處に同様のものを編み入れます、而して鎖を三つ拵へて次からは長編の上部を又長編に致しまして前段の鎖二つの處になりましたら、其中に長編を三つ編み入れて鎖を二つ拵へて同じ處に長編三つを編み入れて鎖を三つ拵へます、それからは前段同様に編んで參ります。七八九段目は同様の方法を繰り返し〳〵て編む。只松編の間の鎖を一段毎に二つ宛編んで參ります。

十段目は其の松編の處を長編一つ鎖三つ

拵へて其長編の上部に帽子編で止め、又長編を二つ鎖を三つ拵へて長編の上部に止めます、斯様に致しまして長編が九つとなりますと其の鎖三つの處が五つになりますから、次は鎖を五つ拵へて其鈎針を七段目の鎖の處に通して止め、又鎖を五つ拵へて前同様のものを編みます、次も同様に鎖を五つ拵へまして七段目の鎖に止め、次も同じ様にして長編の處に移つて前と同じ方法で一方の端に編んで參りますと一つの松山が終了となるので御座います。

次は前同様の方法で初めから編んで參りまして、今迄編み初めの鎖に止めた處をこれからは平(たひら)に編んだ長編の處に止めて參るので御座います。寫眞を御覽になると容易(たやす)く御編みになることが出來るのであります。

14　レース編(其六竪菱)

器具材料準備

編糸　カタン糸三十番手少々。

編針　金屬製角柄付レース用鈎針。

應用編法

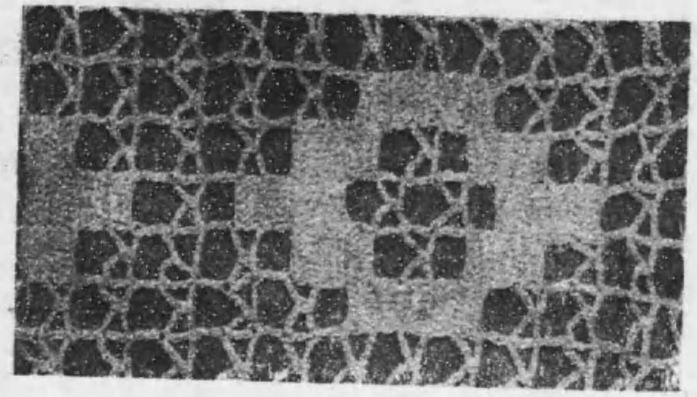
帽子編。長編。

レース編(其六竪菱)の拵方

鎖を五十拵へて後に返つて丁三目の處に長編を一つ編み入れ、又鎖を五つ拵へて鎖の目を五つ飛ばして長編を一つ編む、かくしてこの段を編み終つたら、二段目は鎖を三つ拵へて以前の五つの鎖の中に帽子編で止め、又鎖を三つを拵へて長編の上に又長編を編み入れて鎖を三つ拵へて五つの鎖の中に帽子編で止め、又鎖を三つ拵へて次の長編の處に又長編を編み入れると云ふ様に編んで參ります。三段目は鎖五つ長編一つと云ふ順に編んでこの段を終る。四段目は鎖三つを拵へて以前同様五つの鎖の中央に止めて長編を一つ編み入れる、この方法で三回編みましたら次は前段の五つの長編の目全部に長編を入れて編む、次よりは前同様鎖を三つ拵へて五つの鎖

の處に止め、又鎖三つ長編一つと云ふ様に編んで行つてこの段を終る。次の段は長編一つと鎖五つで編んで行つて前段の長編七つの處は矢張り長編を七つ編んで行く。次の段は今長編を七つ編んである兩側に又長編を七つ編み添へ他は同様。次は前段の長編の處は長編とし他は前同様に編む、次は前同様長編七つを今長編で編んである兩端（りやうはし）に編み添へ中央を五つ鎖編にして編んで行きます。而して其の長編の初めの處の七つを長編で編み、次よりは鎖と長編一つで編んで行つて長編の終りの處は又長編七つ編んで行く、次は前段同様之れでこの模様の半分が終了となる。これからは以前の編方を逆に編んで參りますと全体の終了となるのであります。

レース編（其六竪菱）



終了の寫眞

15　レース編（其七遠山）

器具材料準備

編糸　カタン糸三十番手少々。

編針　金屬製角柄付レース用鈎針。

應用編法

帽子編。長編。二重搦の長編。

レース編（其七遠山）の拵方

鎖を三十拵へて其鈎針を後（あと）に返して七つ目の處に鈎針を通して長編を三つ編み入れ、鎖を一つ拵へて同じ目に長編を三つ編み入れます、而して又鎖を十一拵へて以前の鎖の十目の處に帽子編で止め、又鎖を十一拵へて同じく以前の鎖の十目の處に長編を三つと鎖一つと又長編三つとを編み入れ、端に長編を一つ編み入れますと一段の

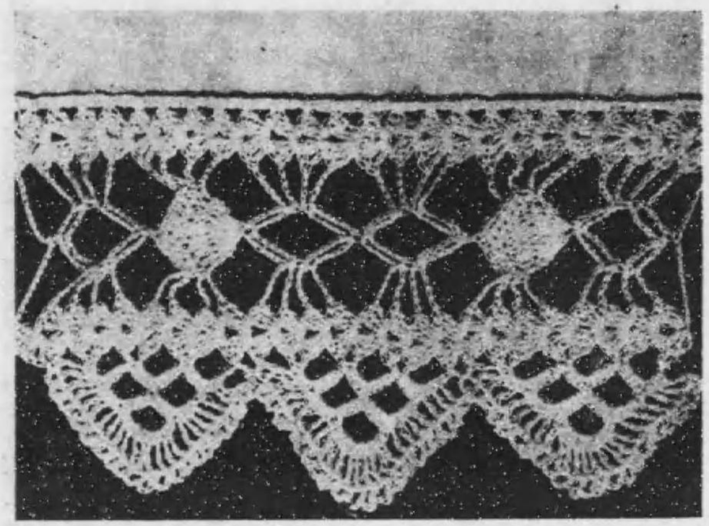
編み終りとなります。二段目は鎖を三つ拵へて一段目の長編六つの中の一つの鎖の處に又長編を三つ鎖一つ長編を三つと云ふ樣に編み入れ、鎖を五つ拵へて前段の十一の鎖の中央の六つ目の處に帽子編で止め、又鎖を五つ拵へて前段に止めた帽子編の處に又帽子編を致ます、それから鎖を五つ拵へて前段の鎖の六つ目の處に帽子編で止め、又鎖を五つ拵へて前段の長編六つの間の鎖の處に長編三つ鎖一つ長編三つを編み入れ、鎖を七つ拵へて初めの鎖の端に帽子編で止めたら持ち替へて三段目に編み移る。三段目は其の七つの鎖の中に帽子編を九つ編み入れて前段の長編六つの中の一つの鎖の處に又長編を三つ鎖一つ長編三つを編み入れ、鎖を五つ拵へて前段に帽子編で止めた處に又帽子編で止め、又鎖を十一拵へて前段に帽子編で止めた目に又帽子編で止めるので御座います、それから鎖を五つ拵へて前段の長編を六つの中の一つの鎖の目に又長編を三つと鎖一つ長編三つと云ふ樣に編み入れて終りの處は長編を一つして次の段に移り編む。四段目は鎖を三つ拵へて前段の長編六つの

中の鎖の處に、又長編三つ鎖一つ長編三つと云ふ樣に編み入れまして、鎖を五つ拵へて前段に止めました處へ又帽子編で止め、鎖を五つ拵へて前段の十一の鎖の中央六つ目の處に帽子編で止め、又鎖を五つ拵へて前段の止めた處に又帽子編で止めます、かくして又鎖を五つ拵へて前段の長編六つの中の鎖の處に又長編三つ鎖一つ長編三つと云ふ樣に編み入れて鎖を七つ拵へて三段目の端の處に帽子編で止めます。五段目は前段の七つの鎖の中へ帽子編を九つ編み入れ、前段の長編六つの中の鎖の處に又長編三つと鎖一つ長編三つと云ふ樣に編み入れて、鎖を十一拵へ前段の中央の帽子編で止めた處に又帽子編で止め、又鎖を十一拵へて長編六つの中の鎖の處へは長編三つ鎖一つと云ふ樣に編み入れ、そして端は長編を一つ編み入れて置きます。六段目は鎖を三つ拵へて次の長編六つの中の鎖の處に同樣の物を編んで鎖を五つ拵へて十一の鎖の中に帽子編で止め、前段の中央の帽子編の處に二重搦みの長編を九つ編み入れて次の十一の鎖の中に帽子編で止め、鎖を五つ拵へて長編六つの中の鎖の

處に又長編三つ鎖一つと云ふ様に編み入れ、鎖を七つ拵へて五段の端の處に止めます、この處は飾の山形を拵へる處となるのでありますから幾分か面倒で御座います が其のお積りで御編みになれば思つたよりは却て容易に御會得になられることだと存じます、されば其の鎖の中に帽子編を四つ編み入れて鎖を七つ拵へて其の鈎針を後に返し、四段と三段との間の山形の處に帽子編で止めて又鎖を七つ拵へて一段と二段との間の山形の中央に帽子編で止め、其の鈎針を後に返して七つの鎖の中に帽子編を九つ編入れ次の七つの鎖の中に帽子編を五つ編み入れて又鎖を七つ拵へて鈎針を後に返し、前段の山形の中に帽子編で止めたら持ち替へて其の七つの鎖の中に帽子編を九つ編み入れ、次は以前に五つ帽子編を編み入れました半分の處に又帽子編を五つ編み入れます、又次の以前に殘つて居る半分の處に帽子編を五つ編み入れるので御座います。

七段目は其の鈎針を直に長編六つの中央の處に又長編を三つ鎖一つ長編三つと云

レース編（其七遠山）



終了の寫眞

ふ様に編み入れ、鎖五つ拵へて前段の二重搦の長編の上部を帽子編で編んで參りまして、鎖を五つ拵へて又六つの長編の中の鎖の處に長編を三つ鎖一つ長編三つと云ふ様に編み入れたら端は長編を一つ編み入れて次に移ります。八段目は鎖を三つ拵へて六つの長編の中の鎖の處に又長編三つ鎖一つ長編三つと編み入れ、鎖を五つ拵へて前段の帽子編の上を又帽子編で編んで參ります、而して鎖を五つ拵へて次の六つの長編の間の鎖の處に又同様に六つの長編の間に鎖を一つ編んで、次から前の山形の

上を長編一つ鎖一つ長編一つと云ふ様に端迄編んで參ります、持ち替へたら鎖三つを拵へて帽子編一つ鎖三つと云ふ様に其の山形の上を編み終りましたら一つの終りとなるのであります。それからはこの方法を繰り返し〳〵編むので御座いますから寫眞を御覽になつて御編みになれば美しい飾編を得られるので御座います。

16　レース編（其八角繋き）

器具材料準備

編糸　カタン糸三十番手少々。

編針　金屬製角柄付レース用鈎針。

應用編法

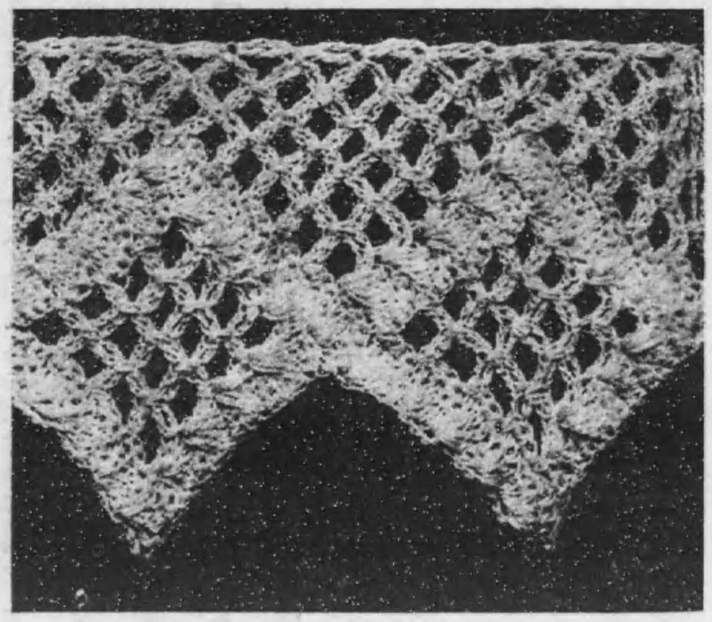
帽子編　長編。二重七寶編。松編。

レース編（其八角繋き）の拵方

初め鎖を三十拵へまして其針の通してある目から三つ目に長編を五つ編み入れ、下

の鎖を二つ飛ばして三つ目に帽子編で止め、次から二重七寶を四つ編む。而して二段目に編み移つて鎖を五つ拵へて同じ目に二重搦の長編を一つ編み入れ、次から同じく二重七寶を編んで前段の松編の手前の止めた處に又長編五つの松編を編み入れ、前段の松編の中央の目に止めて其終りの處に又松編を編む、これで二段目を終ることになります。三段目は鎖を三つ拵へて其元の處に松編を入れて前段の松編の中央に止めて二

レース編（其八角繋き）



終了の寫眞

重七寶の編み方を一つ入れ、次に松編を一つ入れて次から二重七寶編とする、これで三段目を終りました。此編方は松編の方が外側で七寶編の方が布に編み着ける方になりますから其積りでお編み下さいませ、其次を順々に説明したいと思ひますが、餘り同じ事を繰り返して申ますことはくどくもあり却てお判り難いと存じますから省略致します、寫眞を御覽になつて順々に辿つて御編みになる樣に御練習を願ひます。

17　レース編（其九榮松）

器具材料準備

編糸　カタン糸三十番手少々。

編針　金屬製角柄付レース用鈎針、

應用編法　帽子編。長編。

レース編（其九榮松）の拵方

卓子掛の中の編法は編込の模樣を入れるなり何なりとお編み下さい、併し目數等は編むものに依て違ふと云ふことを申添て置きます。こゝには其の周圍に編み付ける飾り編丈に付て説明して置きませう。先づ編み付けますものゝ端の處に糸を付けまして、鎖を十拵へて下の目を十目飛ばして帽子編で止め、又鎖を十拵へて又下を十目飛ばして帽子編で止めて鎖を十拵へて下を十目飛ばして止めます、それから持ち替へて鎖を十拵へて前の十の鎖の中に帽子編で止め、次の十の鎖の中に長編を十五編み入れて次の十の鎖の中に帽子編で止めたら又鎖を十拵へて初めの糸を付けた處に帽子編で止めます。二段目は鎖を十拵へて前段の長編の上を長編一つ鎖一つと云ふ樣にして十五目編んで參りましたら、又鎖を十拵へて一段の初めの處に帽子編で止めます。三段目は其の鎖の中に帽子編を四つ編み入れて鎖を三つ拵へて其の帽子編の目を横に鈎針を通して帽子編を致します、之れで一つの玉樣のものが出來まし

たからそれから帽子編を七つ編んで、鎖を三つ拵へて以前の様に玉を作ります、而して又其の鎖の中に帽子編を三つ編み入れると云ふ様にする、次からは前段の長編の間の鎖の處に帽子編を二つ編み、二つ目の長編の間の處に帽子編を一つして鎖三つの玉を拵へて同じ處に帽子編を一つ編んで次に移ります、而して又帽子編を二つ編んで次は一つ帽子編をして玉を拵へる、かくして一つ置きに玉を拵へて前段の長編の九つの處になつたら又鎖を十拵へて後に返し、前段の長編の初めから六つ目の處に帽子編で止め、又持ち替へて其の十の鎖の中に長編を十五編み入れて其の鈎針で以前の鎖の元の處に帽子編を致します、次からは其の長編を終るまで同様にして編んで參ります。而して前段の十の鎖の中に帽子編を二つして玉を拵へ又帽子編を三つして鎖を十三拵へて次の段に移る。四段目は其の鎖を三段目の長編の上部の玉の一二の間の處に帽子編で止め、其の鈎針を後に返して其の鎖の中に帽子編を三つ、編んで玉を一つ拵へて又帽子編を三つ編んで鎖を五つ拵へ三段目の長編の上部を二

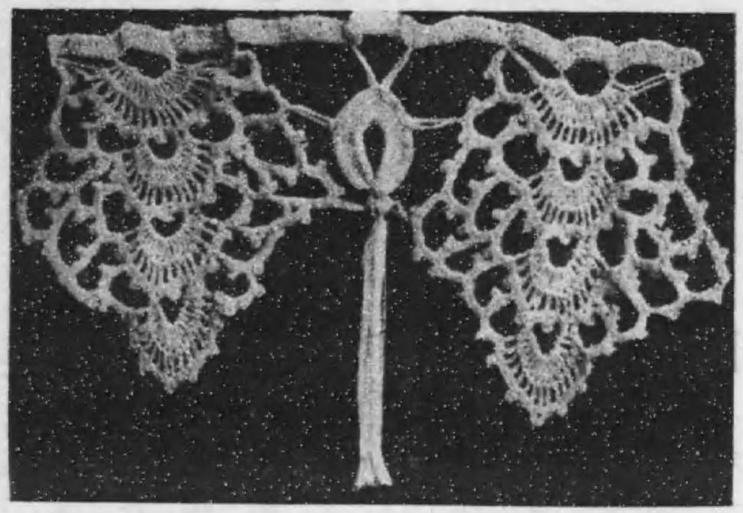
段目の時と同様に編んで行つて端になつたら鎖を十拵へて三段目の長編の上部の玉の間の處に帽子編で止め、其の鈎針を返して其の鎖の中に帽子編を三つ編んで玉を一つ拵へて又帽子編を四つ編み、鎖を十拵へて三段目の初めの鎖の玉の間の處に帽子編で止めて其の鈎針を後に返して編みます。五段目は三段目同様で御座いますが、兩端を次の方法によつて編んで參ります、其の方法は四段目の十の鎖の中に帽子編を三つして玉を一つ拵へ、又帽子編を七つ編んで玉を拵へます處に又帽子編を五つ編むのであります、次からは四段目の長編の上部を三段目同様に編んで行つて次は四段目の鎖の中に鈎針を通して帽子編を四つして玉を一つ編み、又同じ處に帽子編を三つ編んで次の鎖の中に帽子編を四つして又玉を一つ拵へて又同じ處に帽子編を三つ致します。六段目は四段目同様にするのでありますが其の兩端の鎖十の處を二段毎に一つの增目をすることを忘れぬ様にせねばなりません。七段目は五段目と同様。八段目は六段目同様。九段目で終りとなるのでありますからこの段は七段目と

同様に編んで置けばよろしいのではありますが、長編の中央の處で返し編みをする處を罷めて編み終りの帽子編は其の全部の終り半分が殘つて居るのでありますから編み初めの處迄帽子編を編んだら終りと致します。これを榮松飾と申ます、これは用途が大なるものである場合は段數を增して編むか、それとも今の九段の處を初めの一段として改めて九段編んで行くので御座います、斯様に致しますと榮松が重なりまして二階松(にかいまつ)の形となつて面白いものが出來上るのでありますが茲には略して置きます。

以上によつて一つの飾の部分が出來ましたから、次の飾を拵へるには卓子掛の縁の目を三十目飛して以前と同様のものを編み付けて參ります。

それから寫眞に御座います様に其の飾と飾との間の馬蹄形(はていがた)になつて居る飾を編み添へませう、それは先づ鎖を三十拵へて丸くして初めから長編を五十編み入れて帽子編で止め。二段目に移つて鎖を八つ拵へて右側の松の横の角に帽子編で止め、又

レース編（其九榮松）



終了の寫眞

鎖を八つ拵へて元の處に返して次からは前段の長編の上部を帽子編で十五目編んで鎖を七つ拵へ、同く右側の二の松の角に帽子編で止めて鎖を七つ拵へて元の處に返し、次の目から帽子編を十目編んで又鎖を六つ拵へて右側の飾から十目手前に帽子編で止め鎖を六つ拵へて元に返して帽子編を一つ編み、又鎖を六つ拵へて前に止めた處から十目次の處に帽子編で止めて又鎖を六つ拵へて元の處に返し、次から十目帽子編をして右側同様に鎖を七つ拵へて左

側の飾松の下から二つ目の角の處に帽子編で止め、又鎖を七つ拵へて元へ返して帽子編を十五編んで鎖を八つ拵へて左側の四の角に帽子編で止め、又鎖を八つ拵へて元の處へ帽子編で止めると云ふ樣にする、これで編み終りとなりましたからそれに糸の房を付けるのでありますが、其方法は編み糸を四寸位の長さに十五本切つて今の編み終りの處へ掛けてよく締め止めて置けばよろしい、斯樣に致しまして全縁に飾編を付けるので御座います。

それからこの飾編の初めに申ました樣に、模樣の編込方法は諸姉で御存じの事と思ひますから其の圖案を參考に入れて置きました、併し應用するものによつて其目數を替へて頂かねばならぬと云ふことは、本項の初めに申添へて置いた通りて御座いますから氣を付て御編み下さいませ。

18　レース編（其一〇菊花繋ぎ）

器具材料準備

編糸　カタン糸三十番手少々。

編針　金屬製角柄付レース用鈎針。

應用編法

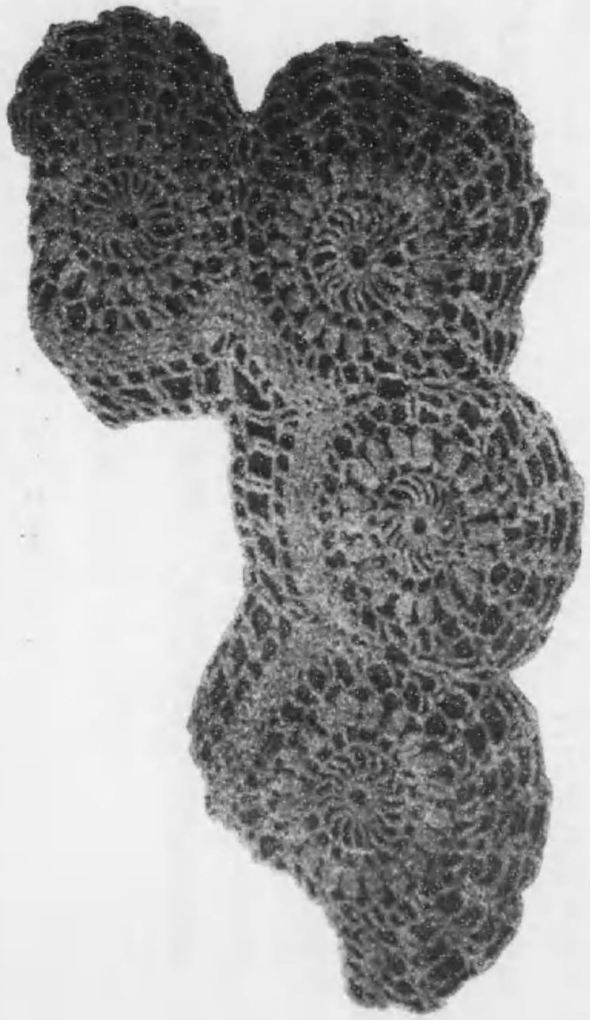
帽子編。長編。二重搦長編。三重搦長編。

レース編（其一〇菊花繋ぎ）の拵方

鎖五つ拵へて之れを丸く其罠の中に帽子編を二十編み入れて止め、次の段は鎖を五つ拵へて次の帽子編の目に針を通して其針に糸を三つ搦んで長編を編む時と同樣に三回に糸を脱づして編む、之れを三重搦の長編と云ふ、鎖を二つ拵へて次の目に前同樣の方法で編む、かくして此段を編み終つたら次は鎖を四つ拵へて前段の鎖の處に針を通して長編を編み入れ、又鎖を三つ拵へて次へ長編を編み入れる、かくして此段を終つたら次の段は鎖を五つ拵へて長編の上部を拔かずに四つ編み入れてそれ

を一時に抜き出し、鎖を五つ拵へて次も同様に長編の上部を抜かずに四つ編んでそれを一時に抜き出す様にする、かくして此段を終る、次は鎖を五つ拵へて前段の鎖の處に長編を一つ編んで鎖を三つ拵へて同じ處に針を通して又長編を編み入れる、次は又三つ鎖を拵へて次の鎖

レース編（其十菊花繋き）



終了の寫眞

の處に針を通して長編を編み入れて前同様にして此段を終る、之れで一つの花形が出來ました、同様のものを幾つも拵へて置いて下さい。

以上終了ましたときはこれを繋ぎ合せて希望の大さのものを拵へるので御座いますが、其の繋ぎ合せの方法は、花瓣様のものゝ上部を十ヶ所前に編んだ長編の二つ同じ所に編んである間の處に長編を一つ編み入れ、鎖を三つ拵へて又同じ處に長編を一つ編み入れて鎖を四つ拵へ又次の三つの鎖の處に針を通して同様に致します、そして其一つの花の處を十ヶ所編みましたら次の花を取つて同様の方法にて編んで參ります、かくして漸次に長いものと致します、それから角の處は之れを十五ヶ所編み付けて置けば宜し　次の段は間の鎖四つとあゝ處を五つにして其の次の段は六つと致します、かくして花と花との境の處は一段毎に一つ減らして編んで參ります、四段編みましたら終りとなるのです。

次に内側は鎖を一つ帽子編を二つ鎖を一つ帽子編を二つと云ふ様に順々に編んで

行つて一段となる、この方法で四段編む、この方も花と花との間の處を一段に二つ減らして編み、二段目よりは一段に一つ宛減らして編んで行く、次は鎖を五つ拵へて次の鎖の處に長編を編み入れると云ふ樣にして一段編んで行つたら次の段に鎖を五つ拵へて二重搦の長編を一つ編み、次は鎖を三つ拵へて前段の鎖の處に二重搦の長編を二つ編み入れて鎖を三つ拵へ、又次を飛ばして次の鎖の處に同樣に編む、かくして此段を終つたら次は鎖二つ長編一つ鎖二つと云ふ順に編みながら少し位つれる氣味に編んで終了となるので御座います。

19　バンドー

器具材料準備

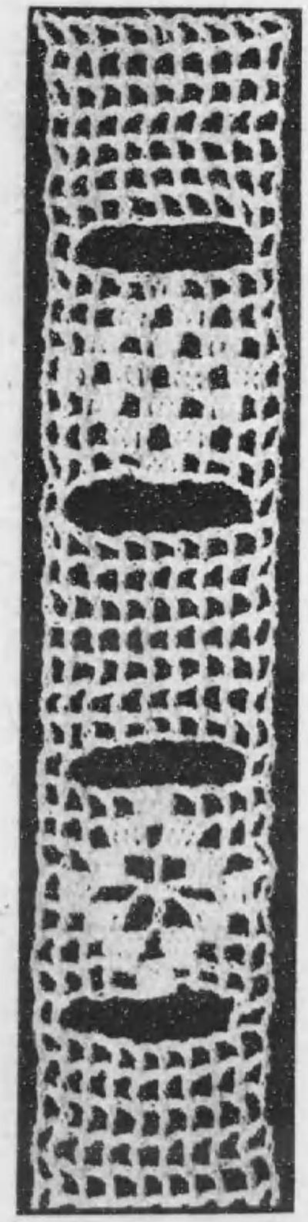
編　糸　カタン糸三十番手少々。

編　針　金屬製角柄付レース用鈎針。

應用編法　長編。

バンドーの拵方

初め鎖を三十三拵へて針の處から八つ目に長編を一つ編み入れ、次からは鎖二つ下の目を二つ飛ばして次へ長編一つと云ふ樣に漸次(だんだん)に編んで參りますと、其長編の處が十になりまして鎖の終りとなります。二段目は鎖を五つ拵へて持ち替へて次の長編の上に長編を編み入れ、又鎖を二つ拵へて次の長編の上に又長編を一つ編み入れ



終了の寫眞

ると云ふ様に致します、かくして漸次に繰り返し〳〵て七段編み續けましたら寫眞の様にリボン通しの部分を明けることにします。其方法は端から長編を二つ編みましたら鎖を二十一拵へて終りの二つ目の長編の處に長編を一つ編み入れ、又鎖を二つ拵へて端の長編の部分と致します、次の段は寫眞の様に花菱の一段少ないものを編んで置きます、又次に以前の様にしてリボン通しを編み、次は模様なく無地にして其次には模様を編み込みます、かくして其必要の丈けに編み作りましたら糸を切り、模様のある方が表になる様にしてリボンを通して用ひるので御座います。

20　下着裾飾

器具材料準備

編　糸　カタン糸三十番手少々。

編　針　金屬製角柄付レース用鈎針

應用編法　帽子編。長編。

下着裾飾の拵方

好みの布地でペテコートを拵へたら其裾の飾編を致します、茲には巴飾を編むことにして先づ鎖を五つ拵へて罠にして初めの目に帽子編で止め、又鎖を五つ拵へて前に罠にした中に帽子編で止め、又鎖を五つ拵へて初めの罠の中に止める、かくして其鎖の處が四つ出來ましたら鎖を四つ拵へて前段の五つの鎖の中に帽子編を三つ編み入れ、又鎖を四つ拵へて次の鎖の中に帽子編を三つ編み入れる、これを繰り返して一段編む。二段目は鎖を四つ拵へて前段の四つの鎖の中に帽子編を三つ編み入れ、次の帽子編の目を手前から二つ編み入れて帽子編か五つになりましたら鎖を四つ拵へて次に移つて同様に編む、この方法を繰り返してこの段を編み終る。三段目は又鎖を四つ拵へて前同様に鎖の中に帽子編を三つ編み入れ、次の帽子編の目を初